ウチの娘は仮面ライダー

ぽかんむ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダーシリーズ本編とは異なる世界にて、様々なライダーに変身して戦う

目次

第１話　トゲトゲの携帯果実 ―― 1
第２話　最高に勇敢な昆虫 ―― 14
第３話　１０年間コブラとクワガタ ―― 25
第４話　煙のバイク ―― 37
第５話　建築の旗 ―― 48
最終話　原初コンプリート ―― 63
特別話　不死身の細菌 ―― 79

第1話　トゲトゲの携帯果実

小さな研究所があった。そこでは日夜、人を安全に超人—仮面ライダー—に変えるための装置—総称してライダーツール—が開発されている。

現在の従業員はわずか六人だ。昔はもう一人いたのだが、昨年失踪してしまった。

そこの所長を勤めるカイトには、娘が一人いる。名前はアカリ、歳は十五、完成品の実験を主に担当している。

ある日アカリは、ガラスの割れる音を耳にして目を覚ました。ベッドから窓を見ると、外はまだ暗い。星も月も今日は見えない。アカリは再び眠りにつこうとしたが、爆音がそれを遮った。怖くなったアカリは、布団にくるまって耳を押さえる。

数分後、これまでの騒音は突然、嘘のように消えた。アカリは部屋内から、手探りで懐中電灯を探し出す。そしてそれを照らしつつ、真っ暗な階段を恐る恐る下りていった。

アカリが一階のラボに着く。その光景は凄惨なものだった。窓ガラスや試験管はすべて割られ、床には危険な液体がこぼれ落ちている。保管されているはずのライダーツールは軒並み消え去っていた。

しかし、アカリにはそれよりも重要なことがある。父親の安否だ。なぜか他の従業員は影も形もおらず、カイトだけが白衣姿で倒れていた。アカリは必死になって、カイトを揺らす。すると彼はすぐに気がついた。そしてアカリに、ここで起こったことについて話始める。

「アカリ……聞いてくれ……何者かの襲撃を受け、ライダーツールをほとんどすべて奪われてしまった……」

「なんだって!?」

「常々口うるさく言っているが、ライダーツールの開発は極秘任務。従って、警察に頼ることはできない。そこでお前に頼みがある。取り返してきてはくれないか?」

「私が!?　そんなの無理だよ!」

「幸いこれだけは奪われなかった。必ずお前の力になるはずだ……」

カイトはアカリに、戦極ドライバーとオレンジロックシードを渡した。二つのアイテムを使えば、仮面ライダー鎧武に変身することができる。

「それから今はまだ使えないが、そのうちお前の力になるアイテムもある」

「ラウズアブゾーバーとシフトデッドヒートと……もうひとつは……なにこれ？　ロックシード？」

「すまない……それは研究過程で偶然できた代物……戦極ドライバーで使うことはできないから、利用方法はわからない。だが決して無駄にはならないはずだ」

「そんなこと言われても……」

「頼む！　お前しかいないんだ！」

「……うん……やる……」

無茶な要求ではあった。ところがアカリは、カイトの懇願に破れ、それを承諾する。現実離れした事態に対応できなかったのか、アカリは正常な判断力を失っていた。こうして、謎の組織とアカリとの壮絶な戦いの火蓋が切られた。

アカリがすぐさま、旅の準備を始める。そして日が昇るのと同じくらいに、彼女は出発した。荷物をお気に入りのリュックサックに積めて。

「とはいえ、どこに向かえばいいのやら」

開始早々、アカリは自分のなすべきことがわからずに、困惑してしまう。そこへ悲鳴が轟く。アカリが駆けつけたとき、彼女の眼前にいたのは、二体のサナギワームと仮面ライダーギルスだった。彼女の足下には、さっきまで生きていたであろう物体が転がっている。

「まだ生き残りがいるぞ。やれ！」

ワームがアカリに襲いかかる。彼女は咄嗟に身を左に翻して、敵の突進をかわした。それから、戦極ドライバーを腰に巻き付け、オレンジロックシードを解錠する。

「変身！」

彼女は錠前をベルトに装填し、カッティングブレードを下ろす。すると、彼女の頭上に巨大なオレンジが現れた。それが頭に覆い被さられ、展開していく。吹き出す果汁と共に、仮面ライダー鎧武への変身が完了した。

「俺たち以外にベルトの所有者がいるとはな。まあいい殺せ」

鎧武は右手に持った無双セイバーで、ワームを一体切り下ろす。さらに横にも切り、追い討ちをかける。もう一体が、彼女の背中を蹴り飛ばした。怯む隙に、正面のワームが殴る。彼女は挟み撃ちにあってしまった。

すると彼女は、大橙丸を左手に召喚する。それから、その場を一回転して、二体に斬撃を浴びせた。

彼女はドライバーからロックシードを取り出すと、それを無双セイバーに取り付けた。すると剣にエネルギーが満ちる。彼女が上段から切りつけると、ワームが一体爆死した。

その光景を目の当たりにしたもう一体は恐れをなす。だが彼女は暇を与えない。ロックシードをもとに戻して、カッティングブレードを二回動かした。高く跳び上がった鎧武が、ライダーキックを放つ。攻撃が当たりもう一体のワームも、緑の爆発を起こした。

「次はお前だ。ベルトを返せ！」

「なかなかやるな。だがそんな雑魚を倒したくらいでいい気になるなよ」

そう言うとギルスは、手足を広げて叫ぶ。すると変化が始まった。胸部にワイズマンモノリスが現れ、手足にトゲや刃が生え、角が三本に増えたのだ。ギルスはエクシードギルスへ進化する。スペックは鎧武や元のギルスを遥かに驚愕するものだ。

エクシードギルスが背中の赤い塊を解き放つ。すると二本の赤い触手が放たれた。それが鎧武の両腕に巻き付く。

彼は近づくと、両腕に生えた刃で切り上げた。さらにパンチするように、何度も何度も斬りかかる。そして触手を上下に揺らして、彼女を地面に叩きつけ続けた。

「リーチの差が厄介ね」

しかし鎧武も諦めない。触手がたわんだ一瞬の隙に腕を交差させ、揺れる勢いも利用しつつ切断した。彼女はなんとか、肉体の自由を取り戻す。

なおも彼の猛攻は続く。彼女は、パンチを剣でいなすなで精一杯だ。するとエクシードギルスが回し蹴りを放った。鎧武は吹き飛ばされ、街路樹に激突した。スペックのみならず、技術面でもエクシードギルスが勝る。

彼が触手を打ち付けて攻撃を仕掛ける。大橙丸を弾き飛ばされ、体に傷を負わされ、大ピンチに陥る鎧武。無双セイバーから弾丸を放つも、エクシードギルスに効き目はない。

彼女は再度立ち上がり、彼に上から斬りかかる。だが動きを読まれ、白羽取りをされてしまう。そして胴に重い拳を受けた。

痛みにこらえて連続パンチを繰り出すが、効いてるようには到底見えない。だがその時異変が起こった。エクシードギルスの動きが止まったのだ。これは好機と、彼女が敵の顔を殴る。エクシードギルスは吹き飛ばされ、地面に転がった。

「なに!?　帰れだと?　ふざけるな!」

エクシードギルスが独り言を吐いた。鎧武は少し驚いたが、すぐに答えを理解する。誰かと通信しているのだろう。

「すまんが急用が入った。この勝負は俺の不戦敗、お前の勝ちだ。だからこいつをくれてやるよ」

ギルスが爆弾のようなものを、地面に投げた。そこから煙がもくもくと立ち上る。追いかけようとする鎧武だが、一歩足を踏み出したとき、倒れてしまった。それでも彼女は、這って追いかけようともがく。

煙が晴れた。そこにはメタファクターだけが残される。アカリはそれを掴むと、意識を失った。

ツールを強奪した組織には、アジトが存在する。あまり大きくない五階建ての建物で、地下室も備わっていた。

一階は倉庫であり、備品が詰められている。大きい冷蔵庫があり、食料品も取り合えずここに仕舞われる。

二階は組織のメンバーの居住スペースだ。全員分の個室が用意されている。

三階は研究室だ。サナギワームはここで作り出された戦闘用アンドロイドである。他にも、ミラーモンスターやバグスターウィルスなどが開発されていた。彼らは単体性能では仮面ライダーに劣るが、安く大量に作れるというメリットを持つ。

四階と五階は多目的スペースである。作業をしたり、練習したり、大がかりな実験をしたりと、用途は様々だ。

地下室は白を基調とした、会議室のような見た目をしている。しかし、光が入らないため少々薄暗い。奥の椅子に男が座っている。それ

以外は誰もいなかった。そこに、先程ギルスとしてアカリと戦った男
―リョウ―が入ってくる。
「ユウスケ、どうして俺を呼び戻した？」
椅子に座っている男は、名前をユウスケと言う。二人の間に上下関係はない。
「君は十分任務を果たしてくれた。あれ以上暴れてもメリットは少なかっただろう」
「戦いに水を射していい理由にはならねぇだろうが」
「戦い？　そう言えば護衛につけたワームの姿が見えないな」
「いきなり鎧武が現れてな。そいつに呆気なくやられたよ。俺たち以外に変身できる奴がいるとは思わなかったぜ」
「恐らくアカリだろうな。見つけ次第殺せ」
「あいつか。通りで」
報告を済ましたリョウは、その部屋から立ち去った。

「ここは……？」
アカリが目を覚ました。視界に天井と丸い蛍光灯が見えることから、ここは室内であることがわかる。彼女はベッドで横になっていた。すると女性が、嬉しそうにアカリの顔を覗きこむ。そして、ここまでの経緯を説明し始めた。
「目を覚ましたんだね。ここは私の家、あなたが道の真ん中で倒れてたから思わず拾っちゃった」
「ありがとうございました。それでは」

世間的に見れば、仮面ライダーは極悪人だ。ベルトを持っていることから、アカリが仮面ライダーということは、女性もわかっているはず。それなのに、女性はなぜか怖がらない。
彼女は布団を剥ぎ、立ち去ろうとする。

「ちょっと？　その体でどこにいくのよ？」
「すみません。だけど私いかないと……」
「しばらく休んでいきなさい。無理しちゃダメよ」
「でも……」

そのとき、テレビから緊急速報が流れる。

『速報です。怪人が現れました。住民の方は速やかに避難し、他所から立ち入ることのないようにしましょう』
「ごめんなさい！　やっぱり私行かなきゃ！」

介抱してくれた女性の制止を振り切り、アカリは現場へと向かった。

「変身！」

鎧武になった彼女は、上昇した走力を使って急行する。彼女が到着したとき、町は一面火の海になっていた。暴れているバグスターウィルスの後ろには、仮面ライダーファイズの姿が見える。
三体のバグスターウィルスが、一斉に向かってきた。彼女は二振りの刀の束頭を合体させ、薙刀モードへ変形させる。そして駆け出し、すれ違い様に切り刻んでいった。

「くらえ！」

鎧武がロックシードを武器に取り付ける。そして薙刀無双スライサーを繰り出した。ウィルスたちは呆気なく切り裂かれる。ウィルスを全滅させたため、残る敵はファイズのみ。

鎧武が薙刀から弾丸を飛ばす。ファイズは左右に身を揺らして見切った。弾丸が切れたのを見計らって、間合いを狭めていく。

ファイズのキックが、彼女の腹に決まった。痛みに苦しむ彼女に対して、ファイズは連続パンチを放つ。最後の一撃が打ち込まれたとき、彼女は激しく吹っ飛ばされた。

「鎧武で勝つのは難しそうだね。ならばこれを試してみようか」

彼女は変身を解除した。前回戦利品として得たメタファクターを取りだし、それを腰に巻き付けた。

「変身！」

「お前にギルスを扱えるかな？」

ファイズの言う通りだった。確かに彼女の姿は、ギルスのそれに変わる。だが、角が短い不完全な姿だ。

「うぉぉぉぉ!!」

雄叫びを挙げた後、ファイズに飛びかかるギルス。彼女は、膝蹴りをファイズの顎に当てて転倒させる。それから、馬乗りになって顔面を戸惑うことなく殴りまくる。

必死に暴れて抵抗するファイズだが、逃れることができない。

「不完全体なのに何て強さ……！　だけどまだよ！」

突然、ギルスの背後に弾丸が浴びせられた。撃ったのはファイズのバイクが変形したロボット―オートバジン―だ。その隙にファイズは、ギルスを投げ飛ばす。

オートバジンとファイズが、同時パンチを繰り出した。ギルスが地面を転がっている間に、彼はオートバジンからファイズエッジを抜き取る。

「これでとどめよ」

ファイズが携帯のｅｎｔｅｒを押し、必殺技の準備を行う。一度素振りをすると、赤い光がギルスへ飛ばされた。光はギルスを、円柱状に拘束する。ファイズが剣を片手に、走り出した。彼は後ろから前へ横に剣を振り、ギルスの首を撥ね飛ばすつもりだ。

絶体絶命のその時、彼女は左腕から触手―ギルスフィーラー―を生み出して、ファイズエッジに巻き付ける。ファイズの手から武器を奪い、右手に持った。

そして、ファイズの胸を剣で突き刺す。必殺技が破られたため、ギルスを拘束していた光は消え去った。

「馬鹿な!?」

「うぉぉぉぉ!!」

ギルスが顔を上げて咆哮する。すると角が巨大化し、かかとの後ろの刃が伸びた。彼女は必殺のかかと落とし―ギルスヒールクロー―を放つ。ファイズは刃から、エネルギーが流し込まれた。ギルスが左足でファイズの胸を蹴り、その反動でギルスは着地した。

「負けるはずが……!」

ファイズが爆発する。あとには、ファイズギアのみが残された。どうやら使用者は逃げ出したようだ。

アカリがギルスの変身を解く。するとすぐに、疲労感が込み上げてきた。強大なパワーを使った代償なのだろう。アカリはなんとか意識を保ちつつ、その場を離れた。

深夜の河川敷にて、二つの人影が対峙している。一人は屈強な男―ケイスケ―、もう一人はアカリと同い年くらいの少女だ。各々ライダーツールを操作し、掛け声をあげる。

「「変身！」」

男は仮面ライダーザビーライダーフォームに、少女は仮面ライダービルドラビットタンクに変身した。

二人の戦いは、パンチの連打から始まる。拳と拳がぶつかり合い、両者にダメージが入る。徐々にビルドの拳打が速を増した。ザビーのパンチを右手で捌き、もう片方の拳で頭部へ命中させる。

「貴様、何者だ？」

「マナ、天才物理学者の一人娘さ！」

ビルドが専用武器のドリルクラッシャーで、ザビーを投げ飛ばす。それからビルドは、タカとガトリングのフルボトルを取り出した。それを何回か揺らし、ビルドドライバーに差し込む。

「ビルドアップ」

ビルドはホークガトリングフォームになった。専用銃―ホークガトリンガー―を召喚すると、ザビー目掛けて引き金を引く。しかし当たらない。ザビーは辺りを駆け巡って避ける。そうしながらザビーゼクターのスイッチを押し、必殺技―ライダースティング―の準備に

取りかかっていた。直撃を恐れたビルドは、背中の翼で宙に舞い上がる。
ビルドが空中から再び狙い撃った。虚をついたこともあり、弾丸は全弾命中する。ザビーは武器のゼクトマイザーを召喚した。放たれる蜂型のマイザーボマーも、ビルドはことごとく撃ち落とす。
ビルドはホークガトリンガーのカートリッジを回転させ、エネルギーを充填させていった。ザビーの射撃を紙一重で華麗にかわしつつだ。やがてフルチャージが完了する。
十回回すと最大の火力で放つことが可能である。空中から、ビルドの銃撃が決まる。鷹の形をした無数の弾丸が、ザビーを貫いた。そしてやがて爆発する。

「覚えてろ!」

使用者の男は、ほうほうの体で逃げ出した。あとにはザビーブレスとザビーゼクターが残される。ビルドはそれを回収すると、どこかへと飛び去った。

アカリは近くの公園でしばし眠りにつく。目を覚ましてある程度体力を回復すると、先程激闘の行われた場所へ再度赴いた。
誰にも拾われることなく、ファイズギアとオートバジンが残されていた。早速ギアを回収してリュックに積める。彼女はオートバジンを、ロボット形態からバイク形態に変えると、それに乗って現場を離れた。
彼女がゴーストタウンを走っていると、道の真ん中に人影が見えた。はねそうになったので、ブレーキをかける。だがそれはただの人間ではなく、仮面ライダーバロンバナナアームズだった。

「また敵か……変身」

コードを打ち込み、アカリはファイズに変身した。オートバジンからファイズエッジを引き抜く。
両者が駆け出した。バロンがバナスピアーを横に払う。ファイズは剣を両手で逆に持ち、左の方に添えた。ところが防ぎきることができない。バロンによってファイズは、強引に投げ飛ばされる。
ファイズは受け身をとって着地した。刃先を向けて、バロンが駆け寄る。ファイズはミッションメモリーを、ファイズフォンにつけ直す。そして携帯を外し、銃に変形させた。近づいているバロンに、フォンブラスターを撃つ。
放たれた光線を受け、バロンの足が止まった。ファイズは左腰から、デジカメ型の武装―ファイズショット―を取り外す。それにメモリーを差し込み、起動させた。ファイズショットを右手に装着すると、ファイズは助走をつける。そして必殺パンチ―グランインパクト―を繰り出した。
バロンが跳び上がる。ファイズは攻撃を避けられ、さらに後頭部をバナスピアーで叩かれた。そしてうつ伏せに倒れる。
傷は痛むもののファイズはなんとか立ち上がり、振り返る。それを待ち受けていたバロン。彼がバナスピアーで突く。ファイズの胸に当たり、彼女は吹っ飛ばされた。
バロンがカッティングブレードを倒す。全身に黄色いオーラが、武器にはバナナ型のエフェクトが現れた。
ファイズは右腰から、ファイズポインターを取り外す。それにメモリーを入れ、足のジョイントにはめた。その場で回し蹴りすると、赤い円錐状の光が飛び出され、バロンの動きを止める。ファイズはそのあと、ライダーキックを放った。
ファイズの右足と、バナスピアーの先端が激しくぶつかり合う。威力が拮抗しているのか、しばし膠着状態が続いた。
やがて、激突の凄まじい衝撃で、両者は吹き飛ばされる。ダメージが大きいのか、二人ともうずくまったまましばらく動けない。
すると、荒い息づかいを見せながら、バロンが立ち上がった。一方

ファイズは、変身が解除されてしまう。
バロンは変身を解くと、アカリを尻目にどこかへと去っていく。その後ろ姿に、アカリは見覚えがあった。

第2話　最高に勇敢な昆虫

翌日、アカリは考え事をしながら、ベンチの上で横になっていた。バロンの正体も気になる点ではあったが、今は戦いのことについてだ。

度重なる苦戦や敗北を味わった彼女は、より強くなることを望んでいた。今のところ、手っ取り早く彼女が強化される方法は四つ存在する。

一つ目はエクシードギルスへの覚醒。外部装置を使わずに強くなることが可能だが、現在はまだ方法がわかっていない。

二つ目はエナジーロックシードとゲネシスコアを見つけ出し、ジンバーアームズになること。アイテムさえ揃えばすぐに実行できるが、どこにあるのかは定かではない。

三つ目はブレイバックルまたはギャレンバックルを見つけ出し、ジャックフォームへの二段変身。カイトからもらったラウズアブゾーバーを使うのだが、二つのバックルがどこにあるのかは不明だ。

四つ目はドライブドライバーまたはマッハドライバーを探して、デッドヒートに変身。カイトからもらったシフトデッドヒートを利用するのだが、例によってドライバーがどこにあるのかはわからない。

いずれも簡単には成し遂げられない難題だ。結局のところ彼女は、敵を倒して実戦経験を積みつつ、情報を集めていくことに決めた。

「……お腹すいた……」

仮面ライダーとはいえ、食欲には勝てない。彼女は、オートバジンの後ろに積み込んだ荷物から、食料を取り出して食べた。廃墟と化した町のコンビニからくすねてきたものだ。

破壊された町から得たものは多い。例えばラジオ。すでにテレビや携帯電話、スマホなどに取って変わられて久しいが、敵の出現をいち早く知るために重宝する。

腹が満たされたあと、アカリはファイズフォンを取り出した。自宅の電話番号を打ち込み、耳に近づける。しかし誰もでない。本来であれば、アカリの父親か他の研究員が出るはずなのに。
番号が間違っているのかもしれないと考えたアカリは、もう一度打ち込もうとする。そのとき、ラジオが鳴った。

『怪人が出現しました！　住民の方は早く逃げてください！』
「……近い！　飛ばそう！」

彼女はバイクに跨がり、現場へと急ぐ。一人でも多くの命を救い、一日でも早くこの戦いを終わらせるために。
現場へ到着する。すでに人の姿はなく、十体ほどの屑ヤミーが暴れていた。少し後ろには、怪人たちを率いる仮面ライダーブレイブレベル２の姿を見える。彼女は一先ず、課題を先伸ばしすることに決めた。

「変身！」

その叫びとともに、アカリはファイズに変身した。屑ヤミーたちを切り捨てながら、鎧武は走る。その速さにブレイブが一瞬驚く。ところが、まもなく平生を取り戻した。
ブレイブはガシャコンソードを握ると、ファイズに向かってきた。二人が剣を交える。
そのとき、高いビルからもう一人のライダーが飛び降りた。その名は仮面ライダーガタック。ガタックダブルカリバーと呼ばれる双刀を操る戦士だ。

「二対二か……オートバジン！　バトルモード！」

ファイズの叫びに応じて、オートバジンがバイクからロボットへ変形される。それが終わると、タイヤから無数の弾丸を発射し始めた。

その威力は、ブレイブとガタックを怯ませるのには充分過ぎる。

「このロボットは俺がやるから、ブレイブはアカリをやれ！」

オートバジンは射撃をやめない。それを双刀で弾きつつ、ガタックは接近を試みる。そして素早い斬撃を浴びせた。だが、傷をつけることはできない。オートバジンが殴る。ガタックは後退りするも、再び立ち向かっていった。

ファイズのファイズエッジと、ブレイブのガシャコンソードが打ち付けあわされる。さらに束を押し付け、つばぜり合いとなる両者。

ブレイブが足を引っ掻けて、ファイズを転ばす。ブレイブはガシャコンソードを、氷剣モードに変えた。逆手に持ち替え、突き刺そうとする。

しかしファイズは、ブレイブから見て左に転がって避けた。彼女はブレイブの腹部を、剣で突き飛ばす。ブレイブがその場で剣を横に振るう。刃から数多くの氷塊が投げ飛ばされた。ファイズフォンを変形した小型銃―フォンブラスターシングルモード―で撃ち落とそうとするが、いくつか氷塊を受けてしまう。

「なかなか骨のあるやつだ」

ブレイブは新たに、ドラゴナイトハンターZのガシャットを取り出した。それをゲーマドライバーに挿し込みむ。レバーを閉め開けすると、ハンターゲーマが現れた。それを纏ったブレイブは、ハンタークエストゲーマーレベル5にレベルアップする。

ファイズがフォンブラスターバーストモードを発砲した。しかしブレイブに、両手をクロスされて防がれる。

左腕のドラゴンガンから、エネルギー波が放たれた。ファイズはそれを避けながら、鎧武に再変身する。そして彼女は、大橙丸と無双セイバーの二刀流で、接近戦を挑んだ。素早く斬りつけて攻め立てる。

ところがドラゴンブレードで、横凪ぎに叩かれて吹っ飛ばされた。

さらにブレイブは、ドラゴンファングから炎を吐き出す。鎧武は多大なダメージを負い、横になってしまった。

「ギルスをなぜ使わない？」

ブレイブが問う。

「あれは……体力の消費が激しすぎる……だからやたらめったら使える訳じゃない……」

「それは初期だけ。何度も何度も戦闘に使うことで段々その欠点は解消されていく。さらに使い続けると、エクシードギルスに覚醒できるそうよ」

「そういうことだったのか……」

「あいつの場合は一年かかったらしい。ただしそれは大して苦戦を経験しなかった場合。装着者が命の危機を感じれば感じるほど、使いこなせるまでの期間は短くなる」

「一年!?　まだベルトが奪われてから一週間も経ってないのにどういうこと!?」

「あっ……これ以上は秘密よ。さあどうする？　このまま死ぬか、ギルスの力でもう少し抗うか」

その時、鎧武の目の前にあるものが投げられた。メロンのロックシードと、ガタックゼクターである。どうやらガタックの変身者は、オートバジンに破れて逃げ出したようだ。

「あいつはお前を倒したあと、そのロックシードで変身しようとしていた。だがまさかそれが私の首を絞めることになるとは」

「まずはこれだ！」

鎧武が新たなベルトを巻く。そこにガタックゼクターを装填すると、鎧武は仮面ライダーガタックマスクドフォームにチェンジした。

両肩のバルカン砲で、ブレイブに弾丸を撃ちまくる。
ブレイブがドラゴンガンから、ビームを発射した。それはガタックに直撃する。ところが、ガタックは平然と砲撃を続けた。

「効いていない!?」

重たい拳が、ブレイブに襲いかかる。何発もパンチを喰らい、ブレイブは仰け反らされた。ドラゴンブレードが振り下ろされる。ガタックはそれを両手で掴み、バルカン砲で攻め立てた。
ガタックがゼクターの顎を畳む。すると装甲が弾き飛ばされた。ブレイブが怯む間に、ライダーフォームへのチェンジが完了する。ブレイブが火炎を吐き出した。それを避けつつ、ガタックはブレイブの背後に回り込んだ。そして、ダブルカリバーで連続して斬っていく。
ガタックが、右腰のボタンを押した。クロックアップを発動すると、さらに縦横斜めに斬撃を浴びせる。ブレイブは反応すら、痛みを感じることすらなく、ダメージを蓄積していった。
クロックオーバーとなる。これまで静止していたガタックが、痛みに身を打ちひしがれた。ブレイブは一度倒れるが、よろよろと立ち上がる。

「これで決める!」

ガタックがゼクターのボタンを連打し、顎を開閉した。すると右足にエネルギーが流れ込む。

「ライダーキック!」

足に稲妻を纏い、跳び上がる。そして大振りのキックを繰り出した。ブレイブを吹っ飛ばし、自身はその場に着地する。ブレイブは爆発し、変身が解除された。その顔を、アカリはよく知っている。ガタックは変身を解くと、その人の近くに寄った。

「ミラさん……どうしてこんなことを？」

倒れていたのは、元々研究所で働いていた女性だった。名前をミラと言う。アカリの疑問に、ミラはこう返した。

「時が満ちたのよ。五年前からの計画を実行に移すときがね……あなたがどれ程頑張ろうと、私たちを止めることはできない」

それだけ言い残すと、ミラは目を閉じて倒れた。あとには、タドルクエストとドラゴナイトハンターZと、今回は使用されなかったドレミファビートのガシャットと、ゲーマドライバーが残される。

激闘を征した彼女だったが、その表情は芳しくない。次から次へと謎が飛び出し、対処に困っているようだ。アカリはしばらく動けなかった。そこに、一人の男がやって来る。

「ちょっといいかい？」

彼女が黙っていると、オートバジンが肩を叩く。加減しているつもりなのだろうが、彼女には激痛だった。だがそのおかげで、謎の人物の声を聞くことができた。

「なんですか……あなたは！」

その男とは、かつて失踪した研究員だった。名前はカツラギ。久し振りの再会に、アカリの心が踊る。

「もしかしてアカリちゃんか？　しばらくだね。突然で悪いんだけど、よければ私の娘にこれを届けてくれないか？」

「娘？」

カツラギの娘のことを、アカリは知らなかった。それどころか、結婚していることすら今知る。

「実は私の娘も君と同じ仮面ライダーなんだ。そしてそれは娘のために開発したその名もラビットタンクスパークリング！」

「どうして私が仮面ライダーだと知っているんですか？」

「知らないのか？　君、テレビじゃ有名なんだよ。日夜悪人と戦う正義の戦士だってね。仮面ライダーは必ず怪人の前に姿を現す。だから私も怪人出現の報道を聞いてここへやって来たんだよ。君か娘に会うためにね」

「娘さんはどこにいらっしゃるのですか？」

「私にもわからんよ。だけど事件が起これば偶然会うかもしれないじゃないか。少なくとも、私が持ってるよりも君が持っていた方が、渡しやすいと思うんだ」

「わかりました！　ところで、聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

「別に構わないよ」

「どうして失踪したんですか？」

「……僕は、ライダーツールの真の開発理由を見誤っていたんだ。あれは悪事に使うためのものだった。僕はそれが嫌で逃げ出したんだ」

「どういうことですか？」

「ライダーツールは初めから、いずれ世界を転覆させるために作られていたってことさ」

「そんな……嘘だ……ということは、敵の目的って」

「日本乗っ取りだ。僕はもう行くね。頑張れ！」

「はい……」

カツラギと話し終えると、アカリはバイクに跨がった。そして走り出す。

走ってる間、彼女はずっと考え事をしていた。中身はズバリ、彼女の父親であるカイトについてだ。

組織にライダーツールを奪われてから、まだ日は浅い。それなのに、ギルスの使い手は少なくとも一年以上、メタファクターを使っていた。どういうことなのだろうか。

カイトが研究を始めたのは六年前。アカリの母親が死亡してすぐのことだった。最初は一人であり、周りは皆よってたかって、彼を馬鹿にした。研究は難航し、次第に資金もなくなり、貧乏生活を余儀なくされた。

だけどプロジェクト開始から一年が経った頃、救いの手が差し伸べられる。とある人物が、資金と人材の提供を行うと持ちかけてきたのだ。条件はただ一つ。研究を極秘に進めること。カイトは快く承諾し、半年後には試作品が完成した。アカリも三年前からは、毎日のように父親の仕事を手伝っていたものだ。

途中でカツラギが離反したこともあったが、それ以外は概ね平和に、仲良く開発に当たっていた。だから、一年前からライダーツールを扱える人物は、従業員の中の誰かということになる。

アカリはそれから、襲撃にあった日のことについても考えていた。

あの日はよくよく考えると謎が多い。なぜか従業員が他にいなかったり、カイトが出血していなかったり。もし本当に怪我をしていなかったのなら、アカリに揺らされるまで気絶する振りをしていたということになる。もちろんスタンガン跡なんて確認されてないのだから、どう考えてもおかしい。

「というかそれ以前に、変身して抵抗しろよ」

アカリは思わず、自分で自分に突っ込みをいれた。直後、彼女の脳裏にとある考えてが浮かぶ。あの事件は”自作自演”だったのではないかと。

その日の夜。マナは森を歩いていた。その途中、何者かが彼女の行

く手を阻む。

「この前の借りを返す」

その正体は、前回ザビーとして戦い、マナに敗北を喫したケイスケだった。

彼はイクサナックルを起動させる。巻いているベルトに嵌め込むと、仮面ライダーイクサへの変身が完了した。さらに顔が開き、バーストモードに姿を変える。

マナはビルドドライバーに、二本のフルボトルを射し込む。そしてビルドニンニンコミックフォームに姿を変えた。四コマ忍法刀を逆手に、敵に駆け寄る。イクサもイクサカリバーを片手に、ビルドに立ち向かっていった。

ビルドが武器のトリガーを押す。するとビルドは、三人に分身した。増殖した彼女らが、三方向からイクサに攻撃を仕掛ける。その斬撃にイクサは翻弄されっぱなしだ。ビルドの一人が、イクサを背後から羽交い締めにする。

「ナイス私!」

ビルドがトリガーを引くと、今度は刀身が燃え上がった。そして自分の分身ごと、イクサを切り落とす。その一撃はイクサに絶大なダメージを与えた。

もう一人もトリガーを引く。そしてその場で剣を振り上げた。すると竜巻が生成され、イクサ目掛けて放たれる。彼はそれに巻き込まれ、高く打ち上げられた。

「これで終わりと思うな!」

そう告げると彼は、ベルトにカリバーフエッスルを装填した。それによって、全身にエネルギーを蓄えられる。そして彼は、落下の衝撃

を利用して強化された必殺技―イクサジャッジメント―を発動した。それを叩き込まれたビルドは、投げ飛ばされてしまう。
イクサは武器をガンモードにして更なる追撃を試みる。しかし弾丸が命中しない。

「どこに行った？」
「後ろだよ！」

ロケットパンダフォームにビルドアップしていたビルド。彼女がイクサの背後から突進する。ロケットの推進力を利用したその攻撃は、イクサを吹っ飛ばした。
ビルドドライバーのハンドルを回すと、必殺技が発動される。彼女はロケットで突っ込み、パンダの爪でイクサを切り裂こうとした。
ところがイクサはとっさに、彼女に飛び乗った。さらにイクサカリバーで突き刺し、墜落させる。そしてビルドを蹴り飛ばした。

「そんな！」
「手数の多さが厄介だ……一気に決める」

彼が口から、イクサライザーを取り外す。それにライザーフエッスルを差し込むことで、イクサはライジングイクサに進化を遂げた。

「それならこれだ！」

ビルドが今度は、ライオンクリーナーにビルドアップする。イクサライザーから放たれる銃弾を、左手の掃除機で吸いとっていく。
イクサがライザーフエッスルをベルトに差し込んだ。すると全エネルギーがイクサライザーに集約される。ライジングイクサの必殺技―ファイナルライジングブラスト―だ。
一方ビルドも、ハンドルを回して必殺技を発動させた。すべてを飲み込もうと掃除機の出力が上がる。

イクサライザーから強力なエネルギー波が発射される。その反動で、イクサは吹き飛ばされるが、木を足場として蹴り返し、跳び蹴りの体勢に移行した。
限界を越えた吸収に苦しむビルドだが、その力を右手に込めてパンチを繰り出す。キックと拳が正面からぶつかり合った。

「うおおお!!」
「はあああ!!」

対決を征したのはビルドだ。彼女の渾身の一撃が勝り、イクサは投げ飛ばされた。その後空中で爆発し、ベルトが落ちてくる。
ビルドはマナの姿に戻ると、マシンビルダーで森を越えていった。

第３話　１０年間コブラとクワガタ

二日後。アカリはバイクに乗って、市街地を走っていた。そこはまだ敵の襲撃を受けていない。彼女は住民の平和を願いながらも、どこか敵の襲来を期待しないでいられなかった。父親との連絡が途絶えた今、ツールの回収以外にやることがなかったからだ。

前方から赤いバイクがやって来る。ライダーは走りながら、銃を発砲した。仮面ライダーギャレンだ。

彼女はベルトにガタックゼクターを入れる。顎を１８０度回すことで、仮面ライダーガタックライダーフォームへの変身が完了した。二人がバイクから降りる。そのあと、しばし沈黙が訪れた。

ガタックは双刀を肩から取り外すと、ギャレンの動きを凝視する。ギャレンは銃を扱うライダーなため、迂闊に攻めることができないのである。

するとギャレンが、醒銃・ギャレンラウザーをホルスターにしまい、向かってきた。ギャレンのストレートパンチを、刀で受けるガタック。

ガタックの斬撃を避けつつ、ギャレンが顔や腹を殴ってくる。彼女は距離を取ると、フォンブラスターバーストモードからエネルギー波を放った。しかし、ギャレンラウザーから放たれた銃弾に、撃ち落とされる。

彼女はガタックダブルカリバーを組み合わせ、巨大なハサミとした。そして挟み込むため、勢いよく前進する。

ギャレンはラウザーに、二枚のカードを読み込ませた。すると彼の右拳が赤く燃え上がる。そして、ガタックの接近を待った。首に迫るガタックの必殺技―ライダーカッティング―を、上半身を左に傾けて避ける。それから、腹部に炎のパンチ―ファイアアッパー―を命中させた。

「こうなったらギルスだ！」

ガタックがベルトを入れ替え、ギルスに変身した。するとすぐに彼女は、縦横無尽に辺りを駆け巡る。敵に狙いを定めさせないためだ。
敵の頭上では、ギルスヒールクローの構えがとられる。だがギャレンはそれに気づいた。ギャレンはラウザーを上に掲げると、彼女を撃墜する。ギルスは防御に難があるため、大ダメージを受けた。
墜落した彼女に、なおも銃弾が襲いかかる。

「ベルトをすべて渡せ。そうすれば命だけは助けてあげる」
「やだね。それにまだ、逆転の策は残されているよ」

咄嗟にオートバジンがロボ形態になり、横からギャレンを殴ろうとする。ギャレンはそれを予想していた。そのため、瞬時に間合いを開けて、攻撃をかわす。
オートバジンとギャレンの銃撃戦が始まった。小回りの効くギャレンの方が、若干優勢だろうか。彼はオートバジンの弾を見切りながら、的確に撃っている。

「オートバジン持ってることくらい知ってるって」
「違うよ、本命はこれから」

ギルスはベルトを、戦極ドライバーに換えた。そしてメロンロックシードを解錠する。それをベルトに装填し、カッティングブレードで輪切りにする。ギルスは仮面ライダー鎧武メロンアームズに変身した。

「ころころ姿を変えようと戦況は覆らん！」
「それはどうかな？」

ギャレンの放った弾丸は、すべてメロンディフェンダーによって防がれた。次にギャレンは、足下を狙う作戦に切り替える。それが実行される前に、鎧武は斜め上へ跳んだ。一瞬でギャレンとの間合いが詰

められる。そして無双セイバーで、縦に大きく切り裂いた。
ギャレンが銃身を、鎧武の腹部に突きつける。そしてそこから接射を行った。盾での防御が間に合わず、派手に吹き飛ばされてしまう。
鎧武が起き上がったとき、ギャレンはカードをラウズしていた。ドロップ、ファイア、ジェミニ。それが、ギャレンの必殺技―バーニングディバイド―を、発動するための組み合わせだ。
ギャレンが跳び上がる。すると二人に分裂した。そして脚部を発火させつつ、空中で大きく回る。
メロンディフェンダーを投げつける鎧武だが、それは幻影を壊したに過ぎない。何物にも邪魔されず、本体のドロップキックが決まった。

「まだだ!」

しかし鎧武は倒れていない。無双セイバーとガシャコンソードを交差させて、バーニングディバイドをなんとか受け止めていた。
彼女が力一杯腕を外側に開く。ギャレンは吹き飛ばされた。

「これで終わりだ」

彼女はガシャコンソードにドラゴナイトハンターZガシャットを挿し込み、さらにカッティングブレードを倒す。
右手に持った無双セイバーをその場で縦に振って斬撃を飛ばしたあと、体を回しながらガシャコンソードを横に切り裂き、ドラゴン型のエネルギーを放出した。
彼女の背後で、ギャレンが断末魔をあげながら爆発する。変身が解け、人間の姿があらわになった。その顔は、やはりアカリの知っている者だった。

「ファイズでも駄目、ギャレンでも駄目か……」
「ファイズに変身していたのもあなただったんですか。タクミさん

……どうして日本を乗っ取ろうとするんですか？」
「どこで知ったのよそんなこと……まあいいわ。腐りきったこの国を建て直すためには、もう一度ぶっ潰すしかないのよ……必ず、仲間が成し遂げてくれる……」

それだけ残して、タクミが絶命する。アカリは後味の悪さを感じながらも、ギャレンバックルを手にいれた。

アジトでは、ユウスケを中心として、対策会議が開かれていた。度重なる敗北を、彼らは気にしていないわけではないのだ。特にユウスケの憤りは人一倍強かった。なので、次の出動では彼が先頭へ立つことに決まる。他の者たちは反対したが、彼の気迫に圧されて最後には承諾した。

しかし万が一ということもある。なので、メンバーの一人であるアラタ―ガタックに変身していた男―が同行することになった。

「……」

すべてが決まったあと、ケイスケだけ真剣な眼差しを残したままだった。他の者たちが去っても、彼はいっこうに席を立とうとしない。不審に思ったリョウが、何かあったのか聞く。しかしケイスケは、適当にはぐらかして帰っていった。

会議の翌日、作戦が実行される。大量のインベスが解き放たれ、街は大混乱に陥っていたのだ。その危機にマナが、バイクに乗って現れる。

「変身」

彼女は仮面ライダービルドラビットタンクフォームに変身した。そしてドリルクラッシャーで、インベスたちを次々に凪ぎ払う。

奥から二人の仮面ライダーが歩いてきた。アラタの変身した仮面ライダー王蛇と、ユウスケの変身した仮面ライダークウガマイティフォームだ。

クウガがビルドに、走って近づく。ビルドはドリルクラッシャーを斜めに振り下ろし、クウガは回し蹴りを繰り出した。二つの攻撃が衝突する。ビルドの武器を弾き飛ばされた。クウガの連続パンチが、ビルドを武器と同じところに吹っ飛ばす。さらに、インベスたちが追い討ちを仕掛けてきた。

一方で王蛇は、ベノバイザーに三枚のカードを取り込む。するとどこからともなく、三体のモンスター――ベノスネーカー、メタルゲラス、エビルダイバー――が召喚された。それらが一斉に、ビルドに襲いかかる。

「これがお前たちの本気か……」

ビルドはドリルクラッシャー銃モードに、ハリネズミフルボトルを差し込む。そして辺り一面にビームを放った。多くのインベスを焼き払っていく。しかしインベスの数はまだ衰えず、ライダーやモンスターにはかすりもしない。

彼女はファイアーヘッジホッグにビルドアップした。それから、右腕からは針を、左手からは炎を撃ち放す。

エビルダイバーとメタルゲラスが突進してくる。彼女は右に側転してかわした。ところがそれを読まれていたのか、ベノスネーカーが毒液を吐き出す。ビルドはそれをまともに喰らってしまった。

王蛇がベノバイザーにカードを入れる。すると空から、メタルホーンが降ってきた。彼は右手にそれを装備する。それでビルドを上から連打した。クウガはタイタンフォームに超変身する。瓦礫をタイ

タンソードに変えると、ビルドに歩みを進めた。

「喰らえ！」

ビルドがイクサライザーに全エネルギーを集中させ、ファイナルライジングブラストを放つ。それがクウガに命中した。その反動は凄まじく、彼女は銃を落としてしまう。だが反動で吹き飛ばされる間に、二本の新たなフルボトルをドライバーに挿す。ビルドはオクトパスライトフォームにビルドアップした。

彼女は右肩からタコ墨を吐き出す。それは攻撃目的というよりむしろ、煙幕としての利用だ。勝ち目の薄いことを悟った彼女は、こうして逃亡を図った。

しかしベノスネーカーが長い身体を活かし、ビルドを絡めた。さらに彼女に、視認不能の矢が射られる。

「ベノスネーカーは暗闇だろうと敵の位置が手に取るようにわかる」

「ペガサスフォームの超感覚を持ってすれば、この程度の芸当は可能だ」

王蛇とクウガが、余裕そうに解説を加える。クウガがペガサスボウガンをその場に捨てた。すると銃が、イクサライザーに戻る。どうやらビルドの落とした銃を回収し、モーフィングパワーでペガサスボウガンに精製していたようだ。

「まずい……！」

同時刻に、アカリはバイクで疾走していた。組織の軍勢が破壊活動を行っていることを、ラジオで知ったからだ。前方に、専用バイク―マシンディケイダー―で通せんぼしている男がいた。彼は名をケイ

スケという。やはり、研究所の元従業員だ。アカリとの距離が縮まると、ケイスケが口を開く。

「アカリか。噂は聞いてるぜ」

「ケイスケさん……あなたも敵なんですか？」

「その通りだ。しかし、その前に伝えたいことがある。お前、仮面ライダービルドって知ってるか？」

「仮面ライダービルド？」

「なんだ、同業者なのに知らないのか。そいつはお前と同じように、俺たちの邪魔をする厄介者だ。だから今、仲間がそいつと戦っている」

アカリはこれまで、自分と同じ立場の仮面ライダーを他に見たことがなかった。しかしカツラギとの話から、そういった存在は仄めかされている。アカリはここに、一つの仮定を作り出した。すなわち、カツラギの娘＝仮面ライダービルドだと。

「どうして教えてくれるの？　ビルドはこの先にいるの？」

「理由は教えられないな。ビルドに関してはその通りだ。だがここを俺が通すとでも？」

「やってやるよ！　変身！」

アカリは鎧武オレンジアームズに変身した。無双セイバーから弾丸を放ち、ケイスケを怯ませる。その隙にオートバジンに乗り込み、発進させた。

「逃がすか。変身！」

ケイスケはディケイドライバーを腰に巻き、カードを中央に挿入する。アーマーが全身を包み込み、彼を仮面ライダーディケイドへと変えた。

ディケイドは専用バイク―マシンディケイダー――に跨がると、鎧武

を追いかける。ライドブッカーを銃モードにして、バイクを狙い撃った。
鎧武はそれをかわしながらフォンブラスターで応戦する。避けられるが、構わず走り続けた。
「お前を行かせるわけにはいかないんだがな」
ディケイドがドライバーに、カードを差し込む。するとディケイドは、ファイズに変身した。彼は左腕の腕時計型機器―ファイズアクセル―を操作する。するとたちまち、ファイズアクセルフォームへと強化変身を遂げた。
円錐上の赤い光が五つ、鎧武の頭上に現れる。ファイズアクセルが超高速で接近し、ライダーキック―アクセルクリムゾンスマッシュ―を繰り出したのだ。円錐が同時に鎧武へ突撃し、彼女は地面に投げ飛ばされる。
アクセルフォームの制限時間が来たため、ファイズの姿に戻った。胸アーマーが格納され、フォトンブラッドも赤くなる。
「お前を倒して、ビルドを救う！　変身！」
投げ飛ばされた鎧武が、なんとか立ち上がる。ベルトを取り換え、ギルスへ変身した。反動を気にしていられる状況になかったからだ。
ディケイドのライドブッカーと、ギルスのギルスクロウが、火花を散らして激突する。彼女の横蹴りが、ディケイドの左腕に防がれた。彼が右手に力を込める。彼女はギルスフィーラーでそれを絡め、自由を奪った。
ディケイドがライドブッカーで、ギルスフィーラーを切断する。さらに顎を蹴りあげて、彼女を打ち上げた。そして彼はカードを装填する。
ディケイドがライドブッカーで、ギルスを乱射した。カードの力で強化された弾丸が、彼女に襲いかかる。彼女は落下すると、変身が解

けてしまう。

「ここまでのようだな」

「強い……！　でも……まだまだ！　次はこれだ！」

アカリはギャレンバックルを取り出す。そしてカードを装填して腰につけ、ターンアップテーブルを引いた。

出現したオリハルコンエレメントが、アカリをディケイドの弾丸から守り抜く。それを突き破ったとき、彼女は仮面ライダーギャレンに変身した。

ギャレンがラウズアブゾーバーに、ダイヤのクイーンを差し込む。そして次に、ダイヤのジャックを読み込ませた。孔雀の力を身に纏ったギャレンジャックフォームが、ここに誕生する。ギャレンは翼の六枚の羽を展開させ、空へと羽ばたく。

彼女はギャレンラウザーに、三枚のカードをラウズする。すると必殺技―バーニングショット―の発動用意が整った。

ギャレンは武器から、燃える弾丸を連続で発射した。そうしてディケイドを退けると、彼女はビルドのもと飛んでへ向かう。万が一のことがあれば永遠にお届け物を渡せなくなる。その心配は彼女の加速に貢献した。

「やるな……しかし、何もかももう遅い。ビルドの死に絶望しながら、貴様も死ぬがいい」

ビルドゴリラモンドフォームが、ドライバーのハンドルを回す。もはや立っているのもやっとの満身創痍の様子だが、ビルドは気力だけでなんとか踏ん張っていた。

瓦礫をダイヤモンドに変え、右手でそれを殴る。粉々に砕かれて破片と化したダイヤが大量に、クウガと王蛇に襲い掛かった。

だがそれでも、二人にはさしたるダメージを与えられない。彼女は王蛇のエビルウィップにす巻きにされた。さらに、クウガドラゴンフォームに、ドラゴンロッドで乱打されてしまう。
駆けつけたギャレンジャックフォームは、ガタックライダーフォームに変身する。高さを活かしたライダーキックを、二人に放った。

「誰……？」
「あなたを助けに来ました。これを受け取ってください」
「まさかこれ、ビルドの強化アイテム？　どうして君が？」
「話はあとです！　今はこいつらを倒しましょう！」
「そうだね！」

ガタックは肩から、ガタックダブルカリバーを取り外す。そしてクウガに挑んでいった。彼の素早い槍裁きを、小回りの効く双刀でいなしていく。
ビルドがラビットタンクスパークリングの蓋を開けた。次にそれをドライバーに挿し込み、ハンドルをぐるぐる回す。するとビルドは新たに、ラビットタンクスパークリングフォームに強化された。
ビルドは、王蛇へのリベンジを目指す。彼女は連続で王蛇の腹を殴っていく。さらに右足で蹴り飛ばした。
二人の間合いが空く。王蛇がベノバイザーに、カードをいれた。するとベノスネーカー、メタルゲラス、エビルダイバーが融合を始める。そして、ジェノサイダーが誕生した。
ジェノサイダーは口から光線を放ち、ビルドに攻撃を仕掛ける。右にステップを踏んで避けたビルド。
彼女はドリルクラッシャーにドラゴンフルボトルをいれつつ、ジェノサイダーの懐に潜り込んだ。そしてボルテックブレイクを繰り出して、敵の腹に突き刺す。衝撃からモンスターはバラバラになった。
王蛇がベノサーベルを振り降ろす。ビルドはそれをドリルクラッシャーで受け、四コマ忍法刀で切り裂いた。ダメージによって後ずさりする彼に対してさらに、ビルドはホークガトリンガーの銃撃で追い

討ちをかける。
王蛇がカードをベノバイザーにいれる。ベノスネーカーが彼の背後にやって来ると、彼は身体を後ろに反らしながらジャンプした。そして一回転したのち、ベノスネーカーの咆哮とともに必殺キック—ベノクラッシュ—を繰り出す。
それに対して、ビルドは高く跳び上がる。そしてハンドルを回す。するとビルドの回りに無数の泡が生み出された。彼女はそれらとともにライダーキックを放つ。
二人のキックが空中で激突した。その力はほぼ互角で、しばらく硬直状態が続く。だが次第に均衡が崩れていく。最後にはビルドが打ち勝ち、王蛇を貫いていった。
ビルドが地上に降り立つ。その背後では、断末魔とともに爆炎があがった。アラタは死亡し、あとにはデッキとVバックルだけが残される。
物陰から覗いていたケイスケは、その光景をすぐには信じられなかった。不安や恐れを感じることすらできず、ただ茫然自失と佇んでいる。

「なに!?」
「もらった！　ライダーカッティング！」

王蛇の死は、クウガに衝撃を与えた。その隙をついて、ガタックは得物でクウガを挟み込み、力強く持ち上げた。武器を通じてエネルギーが流れていき、クウガに反撃を加えた。

「こんなところで……！」

彼は力を振り絞って、マイティキックを放つ。吹き飛ばされたガタックは、変身が解除されてその場に倒れた。

「この借りはいつか必ず返す！」

彼はそう捨て台詞を残すと、トライチェイサーに跨がって去る。追いかけようとするビルドだが、一歩踏み出したとき、バタッと倒れた。体力の限界を迎えたのだろう。

「狙い通りだ……」

なぜかケイスケが不敵な笑みを浮かべた。

第４話　煙のバイク

遅れて駆けつけたオートバジンが、二人を起こすため身体をゆする。先に気がついたマナは、それに少しぎょっとした。ところがすぐに適応する。彼女はなにか違和感を感じた。違和感の招待に気づくと、マナは悲鳴をあげる。

「うわぁぁぁぁ!!」

なんと、フルボトルがなくなっていたのだ。ビルドドライバーは残されていたが、これだけでは何もできない。マナはビルドに変身することが、できなくなってしまったのだ。

「どうしたんですか?」

マナの叫び声を聞き、アカリもまぶたを開く。二人が顔を合わせた。

「どうも……私はアカリと言います。一応仮面ライダーとして戦っています。あなたカツラギさんの娘さんですか?」
「そうだよ。私はマナ!　よろしくね」
「ところでさっきの叫び声はなんですか?」
「私は変身にフルボトルというアイテムを使うんだけど、どこにも見当たらないの。落としちゃったのかな?」

マナが立ち上がろうとする。しかし、足に力が入らない。

「これじゃあ探しに行けないよ」
「もしかしたら、誰かに奪われたのかもしれませんね。私たちが気絶している間、いくらでも機会はあったでしょうし」
「だとしたらとっくに逃げられてるよね。」

「でしたらまずは、体を休めつつお互いに情報を共有しませんか？」
「そうだね」

アカリはマナに、これまでの戦いや自分の過去について話す。さらに、獲得したベルトや武器を見せた。アカリの話が一通り終わると、今度はマナの番が来る。

マナは今年で十五歳だ。カツラギがカイトに出会う前にはすでに産まれていたが、生活圏が遠いこともありアカリと知り合うことはなかった。

カツラギは組織の蜂起を予測していた。そのため、抜け出したあとも開発を続けていた。彼の妻やマナの協力もあり、つい先日ビルドドライバーやフルボトルが完成する。マナはそのあと、カツラギによってアジトの場所を知らされ、乗り込むことにした。

ところがコテンパンにやられてしまう。彼女は命からがら逃げ延びると、日を改めて再び攻め入ろうとする。しかし、今度は刺客に命を狙われるようになり、作戦は難航していた。

「一人で大変だったんですね……でもこれからは大丈夫です。協力して奴等を倒しましょう」
「ありがとう」

誰もいないアジトに、ユウスケが帰ってきた。彼は椅子に座ると、手で顔を覆ってうなだれる。悩みの種は作戦の失敗と、度重なる仲間の死だ。アラタの死を以て、残るは半分になってしまっていた。

絶望の中にいた彼の前に、ケイスケが現れる。彼は大きい袋を、左肩にかけていた。どこに行っていたのか、ユウスケが問う。

「どこに行ってたんだ？」

「ビルドの力の源であるフルボトルと、それらを開発したカツラギを奪ってきた」

袋の中には多くのフルボトルと、眠らされたカツラギ、それから謎のドライバーが入っていた。

「カツラギだと？　ようやく裏切り者を捕まえたのか」

「本気を出せばあっという間さ」

袋の中から、カツラギが解放される。手足が紐で縛られており、口には猿ぐつわがはめられていた。ユウスケが笑い出す。報告を済ますと、ケイスケはカツラギを別の部屋に連れていった。

ケイスケはアカリたちの戦いを、物陰から眺めていた。勝敗が決したあと、二人がその場で気を失う。それを見計らって、ケイスケはフルボトルを奪ったのだ。

続いて彼は、ビルドドライバーやアカリのツールも盗もうとした。しかしそこに、オートバジンがやって来る。ケイスケはディケイドに変身すると、ディメンションキックを繰り出した。オートバジンを吹っ飛ばし、すぐさまバイクに飛び乗り、その場を離れた。そのため、すべてを奪い去ることができなかったのだ。

ケイスケによって、カツラギは研究室に運び込まれた。そこでカツラギは、とある人物と再会する。

一方、アカリとマナの居場所に、バロンがやって来た。アカリは一瞬驚いたが、すぐに戦極ドライバーを取り出し、応戦の構えを見せる。

「お前……もしかして父さんだったりするのか？　でもそんなことは関係ない。今度こそ倒す！　変身！」

アカリは鎧武オレンアームズに変身した。フォンブラスターとギャレンラウザーを遠距離から発砲する。バロンはそれを、バナスピアーで防いだ。
銃撃を防ぎつつ、バロンは距離を詰める。鎧武は大橙丸と無双セイバーに持ち替えると、それを大きく振り上げた。しかしバナスピアーでの刺突攻撃が、彼女の胸を襲う。鎧武は吹き飛ばされた。
「接近戦に持ち込めばリーチの違いが顕著となる。だけど銃で挑んだところで有効打を与えられない。それなら一か八か……」
鎧武は武器を捨て、腕をだらんと降ろし、うつむいた。
「随分と諦めが早いな。まぁいい。これで終わりだ」
バロンがカッティングブレードを倒すと、バナスピアーが光り輝いた。武器を突きだして、バロンが突進を仕掛ける。鎧武は相変わらず微動打にしない。そしてバロンとの距離が極めて近づいた。
そのとき突然、鎧武がロックシードを交換した。カッティングブレードを倒し、メロンアームズを纏う。
バナスピアーは深々と、メロンディフェンダーに突き刺さった。バロンが引き抜こうとしても、それは叶わない。鎧武が膝蹴りを放つ。その攻撃は、バロンの腹部に命中した。
「そういうことか」
バロンはなにかを閃くと、カッティングブレードを三回倒す。鎧武の足下からバナナ状のエネルギーが伸びた。内部からの攻撃には耐えきれず、メロンディフェンダーが粉々に砕け散る。彼女は再び吹き飛ばされ、変身が解かれた。
「武器封じとは考えたな。だがそんなものは容易に想像できる」

アカリの作戦もバロンには通用しない。横になっているアカリに、刃先が向けられた。そのとき、マナが叫ぶ。

「待った！」

「アカリとあんたの関係はわからない。だけど、アカリの敵は私の敵。だから次は私が戦う！」

「だけどあなたはフルボトルを……」

「変身！」

マナは右腕にザビーブレスを巻き付け、そこにザビーゼクターを取り付けた。彼女の姿が仮面ライダーザビーマスクドフォームとなる。かつて戦利品として入手したものだ。

バロンが突く。ザビーは固い装甲でそれを受けきり、拳をつきだした。バロンは一歩退いて避ける。バナスピアーを捨てて素早く右に翻した。それから、ザビーの横腹を蹴る。ザビーは再び殴ろうとした。しかしかわされ、今度は背中にパンチを喰らう。

ザビーはゼクターを回転させた。アーマーが四方に弾け跳ぶ。バロンは身を屈めて避け、転がってバナスピアーを回収した。ザビーはライダーフォームになる。

「これを使ってください！」

アカリはガシャコンソードを投げ渡した。ザビーがそれをキャッチする。燃える刀身を振り回し、バロンに向かっていった。

バナスピアーによる突き刺しを紙一重で避け、頭部に斬撃を浴びせる。バロンは武器を横に薙ぎ払った。強打を浴びながらも、ザビーは全身で武器にしがみつく。さらに、左足でバロンの顔面を蹴った。

「まさか……私とバロンとの戦いを見て動きを覚えた？」

「密着さえできれば槍など恐れるに足りない！」

バロンはバナスピアーを高く掲げ、ぐるぐると回した。ザビーが振り払われ、地面に落下する。バロンはさらに、倒れるザビーを武器で叩きつけた。ザビーが四肢の力で、瞬時に起き上がる。それを見越していたのか、バロンはカッティングブレードを倒した。

バナスピアーから連続で、エネルギーが撃ち出される。ザビーは八の字に走り、狙いをつけさせないようにした。しかし、攻撃はどこまでもついてくる。ザビーは背中にそれを受け、変身解除されてしまう。

「まだだ！　私にはこれがある！　変身！」

マナは次に、イクサへと変身した。彼女はイクサジャッジメントと、タドルクリティカルフィニッシュの同時上段攻撃を放つ。しかしかわされ、背中にバナスピアーの一撃を喰らった。

彼女はライジングイクサへ強化する。アカリからギャレンラウザーを借り、ファイナルライジングブラストとバーニングショットを繰り出した。ところがこれも、バロンに弾き返される。マナは再び、変身が解かれてしまった。

彼女はボロボロになりながらも、立ち上がろうとする。しかしもはや力が入らない。それでも、殺気のこもった目付きだけは一向に曇らなかった。

二人の危機に、オートバジンが自らの意思でバトルモードとなる。オートバジンは二人が気絶したあとに現場へ駆けつけ、その後ディケイドを追っ払っていたのだ。

オートバジンがタイヤをバロンに向けると、そこからマシンガンのように弾丸が発射される。この攻撃をすべて防ぎきることはできない。バロンは高く跳び上がる。そしてロックシードを交換し始めた。

マンゴーのロックシードを使って、バロンはマンゴーアームズになった。

上空からの超重量武器―マンゴーパニッシャー―が、オートバジン

の頭部を粉々に砕く。彼は弾丸を恐れず、何度も叩きつけた。オートバジンが倒れると、彼はカッティングブレードを倒してとどめの準備をする。

「やめろ……！」
「よせ！」

二人の懇願虚しく、バロンは振り上げた武器を、オートバジンに叩き込む。オートバジンは木っ端微塵となって爆発した。
タクミを倒してファイズギアを奪ってから、アカリは何度もオートバジンに救われた。普段の足としても、どれほど役立ったかは計り知れない。アカリはオートバジンに対して、愛着を持っていた。たとえ機械だったとしても、破壊された怒りは収まることを知らない。

「許さない！　絶対にお前を倒す！　変身！」

アカリはギルスに変身した。一瞬で懐に入り、連続パンチを放つ。そのあと膝蹴りでバロンを吹っ飛ばすと、ギルスは斜めにジャンプして空から接近した。
上に狙いを定め、バロンがマンゴーパニッシャーを突きだす。彼女はそれの先端に着地した。そして再び跳び、後ろに回り込む。バロンの背面を何度もギルスクロウで切りつけ、頭突きで吹き飛ばした。

「小回りの利かないマンゴーとの相性は最悪だ。再びバナナに……」

バロンはバナナロックシードを手に取る。しかしそれは、ギルスが伸ばした鞭―ギルスフィーラー―によって奪われた。

「ちくしょう！」

バロンは激昂すると、地面にマンゴーパニッシャーを叩きつけた。

砂塵が舞い上がる。その中で、バロンはドライバーを交換し、新たに仮面ライダーアクセルに変身した。
　砂埃が晴れる。アクセルのエンジンブレードと、ギルスのギルスクロウが、火花を散らして何度も激突した。アクセルが剣を振り下ろす。左の方向に避けたギルスは、足を引っ掻けて転ばした。馬乗りになり、噛みつき始める。
　アクセルはギルスの腰を持ち、投げ飛ばした。ところがギルスは、すぐにまた襲いかかる。今度はパンチの応酬が始まった。お互いの拳と拳がぶつかり合う。その中で、ギルスが回し蹴りを放つ。アクセルは吹っ飛ばされ、変身が解除された。その素顔に、アカリは驚く。

「お前は……リョウさん！」
「ばれちまったか。強くなったな、おまけにいいことを教えてやる」
「なに？」
「俺たちはカイトの発明品を奪うため、五年前やつに近づいた。だからあいつは俺たちの仲間ではない。最初は誘ったんだがな、遂に奴が首を縦に振ることはなかった」
「お父さんは今どこで何をしているの？」
「そこまで教える義理はない」

　そう伝えると、リョウは再びアクセルに変身する。彼はドライバーを外して、バイク形態になった。そしてどこかへ去っていく。
　ギルスが元の姿に戻る。戦いの疲れはあるが、気づけば副作用は無くなっていた。マナが駆け寄ってくる。

「さすがだね」
「でも逃げられちゃった……」
「そこまで追いやっただけでもよくやったよ」
「……」

　アカリは出発してから、カイトと連絡が取れないでいた。最初は気

に留めず、途中からは組織の一員を疑っていたアカリ。しかしここに来て、亡くなっている可能性が浮上した。いや、これまでは無意識のうちに、考えから除外していたのだ。
見かねたマナは、アカリと提案する、
「一度休もう。お父さんのとこまで案内するよ」
「そうですね。ありがとうございます」

こうして二人は、マナの家に行くこととなった。二人ともバイクを失ったため、徒歩や交通機関の使用を強いられる。電車やバスを乗り継ぐこと一時間、ようやく辿り着くことが出来た。
マナの先導で、アカリは玄関に入る。奥からどたばたと足音が響いた。その人物がやって来る。アカリは思わずガン見した。なんとその人は、以前アカリを助けた女性だったのだ。どうやら、アカリの母らしい。
世間の人からすれば、仮面ライダーはテロリストである。なのにどうして自分を助けたのか、アカリは少し気になっていた。変身を解いていたとはいえ、ベルトを持っていたことは明らかだからだ。だが、女性がすでに、マナのような正義の仮面ライダーの存在を知っていたのなら話は早い。アカリは偶然に感謝した。
女性が食事を作ってくれることになる。彼女はキッチンに入り、急いで準備を進めた。アカリとマナは、四人掛けのテーブルに腰かける。

「あれ？　お父さんいない」
「どこかに出掛けているんでしょうか？」
「そうかな……」

マナはビルドフォンを取り出し、画面を眺めた。操作していると、いきなり彼女が、驚きの形相を浮かべる。不審に思ったアカリは覗きこむ。マナは咄嗟に画面を隠すと、適当に愛想笑いを浮かべた。

まもなく、料理が運ばれてくる。二人はそれをペロリと平らげた。そのあとお風呂に入り、あがると二回のマナの部屋に向かう。
押し入れから布団を取り出し、床に敷いた。マナがスイッチを押すと、蛍光灯の電気が切れる。二人は布団に入ると、すぐにすやすやと寝息をたてた。
それから時間が経ち、時計が午前一時を示す。敷かれた布団の中に、うずくまる影が二つある。アカリは掛け布団を剥ぐと、もう一つの布団を見てこう言った。

「眠ったようだね……」

ビルドフォンにはとある機能が備わっている。父親であるカツラギの居場所、正確にはカツラギの携帯電話がどこにあるのか、ＧＰＳで知ることができるのだ。
カツラギの携帯は、敵組織のアジトを示していた。自ら赴いたとは考えにくいため、散歩中に誘拐されたのだろう。マナはこれ以上、アカリに戦わせたくなかった。そのため、一人で助け出そうと決心する。
アカリの寝顔を一目見ようと、マナは、布団をこっそりめくった。しかしそこに彼女の姿はない。あるのはぐるぐるにされた座布団だった。

「どうしたんですか？」

アカリは電気をつけながら、そう言った。さらに、ドアの前に陣取る。

「いや……トイレに行こうかと……」
「とぼけないでください！　マナさんの行動には不審な点が多すぎます。それを説明してくれるまで、私はここを通しません」
「お見通しだったのね……私のお父さんは今、組織のアジトよ」

「それなら夜襲を仕掛けましょう」
「乗り込む気!?」
「あなたもそのつもりなんでしょ?」
「まぁね……一緒に行こう!」
「まずはフルボトルの奪還からですね」

こうして二人は、まだ暗い中家を飛び出す。
その頃アジトでも、動きがあった。ケイスケは最終決戦が近いことを肌で感じ、そのための準備を進めていた。そして遂に、それが完了する。
アカリとマナが近づいてきていることを、ユウスケから知らされた。ケイスケが総員に、戦闘体勢を整えるよう指示する。

「「蒸血」」
「潤導」
「「変身」」

第5話　建築の旗

アジト前にて深夜、両陣営がまみえる。アカリとマナに相対するのは、ヘルブロス、ナイトローグ、ブラッドスターク、仮面ライダークローズチャージ、仮面ライダーグリス、そして彼らを束ねるディケイドだ。ディケイド以外は、ケイスケが独自に雇った人員が変身している。

アカリは仮面ライダーブレイブハンタークエストゲーマーレベル5に、マナは仮面ライダーライジングイクサに変身した。

「先に行って！　アカリ！」
「そんなことしたくないしできませんよ……」
「よかろう……通してやる。クウガ敗北の要因があの二人の共闘にあるのだとしたら、二人を引き離した方が得策だ。アカリだけなら他のやつらで倒せるだろう」
「でも……」
「お願い！」

ブレイブはイクサの意を汲み取ると、そのエリアを突破してアジト内部へ侵入した。

「まずは俺からだ！　おらっ！」

グリスが左腕のツインブレイカーアタックモードで、イクサに突きを繰り出す。イクサは右腕でそれを弾きつつ、腕にザビーゼクターを取り付けた。ゼクターを展開すると、巨大な毒針が現れる。

イクサの背後から、ローグとスタークがトランスチームガンを発砲した。イクサがジャンプして避け、弾丸はグリスに当たる。イクサは空中で縦に後ろ側に回りながら、イクサカリバーとイクサライザーを撃った。攻撃は正確に、二人の頭部をとらえる。

「連携しろ！」

滞空しているイクサを、ツインブレイカービームモードでグリスが狙い撃った。イクサは一瞬動揺したが、一回転して速度を殺し、綺麗に着地する。

ヘルブロスがたくさんの歯車型エネルギー波を、イクサに飛ばした。イクサはそれに飛び移って、ヘルブロスに近づく。そして顔面に、右足で飛び蹴りを喰らわそうとした。ヘルブロスが腕を交差させて直撃を防ぐ。イクサは左足でもう一度蹴って、反動で距離をとった。

そのときグリスは、イクサから見て左にいた。グリスがツインブレイカーアタックモードに、二本のフルボトルを差し込む。そしてイクサ目掛けて走り出した。グリスはエネルギーの纏った武器で、イクサに殴りかかる。イクサはそれの刃先を、ザビーゼクターのスイッチで受け止めた。

「ライダースティング！」

イクサはグリスの胸に、針を突き刺した。スーツを貫通して内部へ攻撃が伝わり、グリスは爆発した。

「なんなのだあの力は……！」

「もっと数の利を活かせ！」

イクサは二本のフルボトルを、グリスの死体から拾った。彼女はビルドドライバーに乗り換え、それを差し入れる。

「イクサやザビーも悪くはないけど、やっぱビルドだね！」

仮面ライダービルドフェニックスロボットが誕生した。マナはようやく、本来の力を取り戻す。

「こうなれば奥の手だ。ビルド部隊出撃！」

ディケイドが叫ぶ。すると外野から、何人ものビルドがぞろぞろとやって来た。フェニックスロボから見て右にはアジト側からラビットタンク、ニンニンコミック、ライオンクリーナー、キードラゴン、ファイアーヘッジホッグ。左にはゴリラモンド、ホークガトリング、カイゾクレッシャー、ロケットパンダ、オクトパスライト。そして正面、ディケイドの横にはラビットタンクスパークリングの姿がある。

「これが俺たちの力だ！」

勝ち誇るように、ディケイドが叫んだ。だが、ビルドは冷静に返事をする。

「……素人にビルドを扱うことはできないさ」

ビルドは体を高速回転させ、イクサライザーからファイナルライジングブラストを繰り出した。その場にいた者たちはことごとくのけぞる。

「これしきの攻撃、ライオンクリーナーならすべて吸いきれたはず」

ビルドが赤い翼を広げて空へ舞い上がる。翼から火炎弾を数多く撃ち出して、地上を徹底的に焼き払った。

そこへホークガトリングとナイトローグが駆けつける。ホークガトリングが、専用武器であるホークガトリンガーを乱射した。ビルドは全弾を左腕で防いで近づく。そして首を掴み、腕を大きく回したのち、ローグに投げつけた。二人が真っ逆さまに落ちていく。ビルドはハンドルを回した。

ビルドのライダーキックが決まる。二人は地上に帰ることなく

散った。
ビルドの着地地点には、キードラゴンとクローズチャージが待ち構えている。ビルドは、空から落ちてきたトランスチームガンをキャッチした。それから、キードラゴンに的確な銃撃を浴びせる。
キードラゴンが鎖を伸ばした。それが巻き付き、ビルドは身動きがとれなくなる。クローズチャージはツインブレイカーアタックモードに、クローズドラゴンをセットした。
クローズチャージはビルドに飛びかかろうと、地から足を離す。身の危険を感じたビルドが、勢いよく後方に走り出した。キードラゴンは引きずられ、さっきまでビルドのいた地点に連れられる。味方に必殺技を当てまいと、もがくクローズチャージだが、彼は宙で自由に動けない。結局キードラゴンは、クローズチャージの手によって殺された。
爆発の衝撃によって、フルボトルが二つ飛んでくる。ロックはビルドがキャッチし、ドラゴンは直接トランスチームガンに差し込んだ。トランスチームガンからスチームアタックを繰り出す。竜型のエネルギー波が、クローズチャージを吹っ飛ばした。
追い付いたゴリラモンド、ラビットタンク、ニンニンコミックが、ビルドに襲いかかる。ビルドはホークガトリングにビルドアップし、再び空中へ躍り出た。空から必殺の銃撃を浴びせてゴリラモンドを仕留める。さらにゴリラモンドへビルドアップして、位置エネルギーによって強化されたパンチを、ニンニンコミックにぶつけた。
ビルドはニンニンコミックを巨大なダイヤモンドに変える。そしてそれを殴りつけた。大量の細かい破片がラビットタンクに飛び散り、その身を粉々に打ち砕く。
「分身とかされる前に倒せてよかった……」
ディケイドがアタックライドスラッシュを使う。ライドブッカーでビルドを切り下ろした。ビルドはパンチで、ディケイドを吹き飛ばす。そして一瞬の隙をついて、ニンニンコミックにビルドアップし

た。
ビルドは火炎斬りを放つ。しかしそれは、左に身を翻されて避けられた。反対にライドブッカーでの銃撃を受け、投げ飛ばされる。
スタークがビルドの背中を、スチームブレードで切り裂こうとした。ビルドはそれに気づくと、剣を横に掲げて受け止める。
ビルドは咄嗟に、六人に分身した。そのうちの二人は、スタークの背中に剣を突き刺す。さらに火炎斬りを繰り出し、スタークを芯から燃やした。
一人はディケイドと交戦中だ。劣勢だが、なんとかディケイドの斬撃を凌ぎ続ける。もう一人が、クローズチャージのレッツブレイクの前に倒された。しかし潜んでいた最後の一人が、ツインブレイカーからクローズドラゴンを奪い取る。直後、分身が消えた。

「変身!」

ビルドはクローズドラゴンに、ドラゴンフルボトルを差し込む。そしてそれを畳んで、ドライバーに取り付け、ハンドルを回した。

「新しいビルドアップか……?」
「違う。仮面ライダークローズだ」

クローズがハンドルを回す。するとクローズの背後に、竜型のオーラが現れた。それが吐き出す青い炎とともに、ライダーキックを放つ。その攻撃によってヘルブロスが倒された。
ドリルクラッシャーと4コマ忍法刀を手にしたスパークリングが、クローズに斬撃を浴びせる。横に挟み込むよう斬られ、クローズはダメージを負ってしまう。ドリルクラッシャーガンモードで撃たれ、蹴り飛ばされた。
クローズに対して、カイゾクレッシャーが立て続けに矢を射る。それを避けるため、クローズは蛇行して走った。
クローズの行った先にはファイアーヘッジホッグの姿がある。

ファイアーヘッジホッグが左腕から炎を出した。クローズは咄嗟に、地面へ這いつくばる。炎が止むと今度は針が放たれた。クローズは地面を転がってなんとかかわしきると、ファイアーヘッジホッグの横に飛び出す。専用武器のビートクローザーを召喚し、斜めに切り上げた。左拳で吹っ飛ばした隙に、クローズは武器のグリップエンドを三回引く。

その斬撃は、立ち上がったファイアーヘッジホッグを、まっぷたつに切り裂いた。

オクトパスライトの触手が伸びる。クローズの左腕がそれに絡まった。やって来たクローズチャージが、クローズに連続パンチを喰らわす。クローズは武器を足に落とし、クローズチャージの顎に蹴り上げた。クローズチャージがわずかに後ずさる。クローズは再びビートクローザーをキャッチすると、触手を切り落とした。ビートクローザーにロックフルボトルを差し込み、グリップエンドを三回引く。

鍵状のエネルギーを纏ったビートクローザーを、クローズチャージに叩き込んだ。クローズチャージの死を確認すると、クローズはベルトを剥ぎ取る。

「まずはこれだ!」

クローズがスクラッシュドライバーを巻き付けた。そこに、先程グリスから奪ったロボットゼリーをはめる。クローズはグリスに変身した。グリスはドライバーのレンチを下ろし、スクラップフィニッシュを発動させる。肩や背中からゼリーを噴出させて加速し、ライダーキックをライオンクリーナーに繰り出した。

グリスは着地後、ライオンフルボトルをドライバーにセットする。

グリスがライオンのエフェクトとともに、全力のパンチを放った。それを受けたオクトパスライトは、粉々に砕け散る。

そのときカイゾクレッシャーは、専用武器のカイゾクハッシャーに、限界近くまでエネルギーを充填していた。それが解放される。放

たれた特大の矢を、グリスは上半身を反らして避けた。彼女は流れるようにツインブレイカービームモードに二本のフルボトルを差し込む。それを喰らったカイゾクレッシャーは爆死した。

「あれだけいたのに!?」
「いくらお父さんの発明が凄かったとしても、素人に扱いこなせる代物じゃないよ」

グリスはドラゴンゼリーをドライバーに差し込み、クローズチャージに変身した。スパークリングのパンチを手で受け止める。そしてすぐさま腹に蹴りをいれた。
スパークリングのスパークリングフィニッシュと、クローズチャージのスクラップフィニッシュが衝突する。ライダーキック対決を征したのはクローズチャージ。スパークリングは倒れた。

「全滅か……」
「そんなことはありませんよ」

上空から、ロケットパンダの声が聞こえた。右手には人影が見える。

「お父さん!?」

ロケットパンダが着陸した。確かに彼は、カツラギを右腕に抱えている。

「これ以上抵抗すればこいつの命はない」
「見事だ！」
「お前の命と引き換えに、カツラギを助けてやる。どうする？」
「私が死ねば、お父さんを助けてくれるの？」
「そうだ。反対に、もしお前が逃げたりこれ以上抵抗するのであれば、

カツラギの命はない」
「……始めっから答えはひとつ。どっちの命も失わずに、お前たちを倒す」
「そんな選択肢は与えていない」
「選択肢は……自分で勝ち取るもんだろ！」

瞬時にイクサカリバーを取りだし、ロケットパンダの脳天に弾丸を当てる。油断していたこともあり、ロケットパンダの集中が一瞬途切れた。その隙に、カツラギが逃げ出す。
ディケイドがカツラギを射殺しようとした。クローズチャージがツインブレイカービームモードで、ライドブッカーから撃たれる弾丸を相殺させる。

「貴様！　殺す！」
「……ぶっ潰してやるよ」

ロケットパンダが急上昇した。ボルテックフィニッシュを発動させると、まっ逆さまに降下する。ロケットパンダはどんどん勢いを増しながら落ちていく。あと少しで命中しそうと思われたとき、クローズチャージが、パンダの爪を掴んだ。そして投げ飛ばした。ツインブレイカービームモードに、クローズドラゴンを差し込む。
青いドラゴンが撃ち出された。それを受け、ロケットパンダは爆発する。

「やはり最後に信じられるのは己だけか」

部下をすべて失ったというのに、ディケイドはあまり動揺を見せない。それどころか、すっかり余裕を取り戻していた。

「お前を倒す！」

クローズチャージも、引き続き闘志を燃やす。

ブレイブに変身したアカリは、アジトへの侵入を果たした。ブレイブはインベスやバグスター、ミラーモンスターなどを倒しながら、上へ続く階段を探す。

しばらくして、ブレイブが二階に登る。そこにはリョウが待ち受けていた。リョウの正面には、専用武器のエンジンブレードが突き刺さっている。

リョウはアクセルドライバーを腰につける。そして取り出したアクセルのガイアメモリを鳴らした。

「変……身！」

リョウが仮面ライダーアクセルに変身した。彼はエンジンブレードを両手で引き抜く。そして前へ走り出す。ブレイブは走りながら、左腕のドラゴンガンからビームを発射した。アクセルがそれを、エンジンブレードで受け止める。

両者の間合いが狭まった。ブレイブは右腕のドラゴンブレードを、アクセルはエンジンブレードで、火花を散らしながら打ち合う。

アクセルが剣を右から横に振り払った。ブレイブは吹き飛ばされる。ところがその間に、ドラゴナイトハンターZガシャットをキメワザスロットホルダーに差し込んだ。

ブレイブは着地するとすぐに、全身から大火力のビーム―ドラゴナイトクリティカルストライク―を繰り出す。ブレイブの正面では、攻撃によって爆発が起こった。

「やったか……？」

「後ろだ！」

アクセルがエンジンブレードで、ブレイブの背中を横に切り裂く。さらに左足で蹴り飛ばした。ブレイブが倒れながら振り向く。アクセルはそれまでの赤いボディから一転、身軽そうな青いボディを持つアクセルトライアルになっていた。

「スピードならこれだ！」

ブレイブがベルトを乗り換え、ガタックライダーフォームに変身する。ガタックは腰のスイッチを押し、クロックアップした。

二人の青いライダーによる、超高速バトルが始まる。アクセルが剣を降り下ろした。ガタックはそれを左に回り込んでかわす。そして背中に、双剣による斬撃を喰らわせた。

アクセルが後ろにハイキックする。ガタックは吹き飛ばされた。アクセルは振り返ると、トライアルメモリを斜め上に投げて、ガタック目掛けて走り出す。

追い付いたアクセルは、目にも止まらない早さでひたすらガタックを蹴った。まだガタックは宙に浮いたままだ。９．７秒後、ガタックは落下とともに爆発した。

しかしガタックもただでは終わらない。ガタックの投げたダブルカリバーが、アクセルに当たった。彼が油断していたこと、アクセルトライアルが紙装甲であることもあり、その攻撃は効く。

流れが変わった。今度はガタックが攻め立てる。ガタックの繰り出したパンチを、アクセルは地面を転がってかわした。彼はそのまま直進し、ガタックとの間合いを空ける。次に、戦極ドライバーと未知のロックシードを取り出した。

「こいつで一気に片をつけてやろう」

アクセルがベルトを取り替える。そこにカチドキロックシードをはめ、カッティングブレードを倒した。アクセルは仮面ライダー鎧武カチドキアームズへ、強化を遂げる。

「お前も鎧武に!?」

ガタックは前に走り、先程投げた双刀を掴んだ。振り返ると、カチドキに向かっていく。素早く近づき、連続で斬る。しかしカチドキには効かない。カチドキの重いパンチを受け、ガタックは吹き飛ばされてしまった。

ガタックはフォンブラスターで射撃を行う。ビームは正確に敵を捉えるも、カチドキは動じない。

「装甲はマスクドフォーム以上か?」

カチドキが火縄橙ＤＪ銃を取り出す。そして特大のビームを放った。ガタックは鎧武メロンアームズに変身し、メロンディフェンダーで受け止める。

火縄大橙ＤＪ銃と無双セイバーを、カチドキは合体させる。大剣を構えるカチドキに対し、鎧武も腰の鞘から無双セイバーを引き抜いた。ほぼ同じ速さで、二人が刀を打ち合う。

しかし重さと腕力の差は覆せない。鎧武は一方的に打ち負け、よろめいてしまった。カチドキが追撃してくる。鎧武は盾で斬撃を受けつつ、後方に下がった。それから、無双セイバーで敵に銃撃を浴びせる。だが固い装甲の前には意味をなさない。

「強い……次はこれだ!」

鎧武はベルトを乗り換え、ギャレンに変身した。ギャレンラウザーにカードを三枚スライドさせ、必殺技―バーニングディバイド―を発動させる。

二人に分身したギャレンの、燃えるドロップキックが、カチドキにクリーンヒットした。着地したギャレンの背後から、大音量な爆音が聞こえる。

カチドキがその中から平然と歩いてくる。そしてギャレンの後頭部をパンチした。ギャレンは吹っ飛ばされるも、空中でジャックフォームとなって、そのまま空へ舞い上がる。カードをラウズして、火の弾を連続で撃ち出す必殺技―バーニングショット―を繰り出した。

それに対してカチドキは、カチドキロックシードを得物に取り付ける。カチドキチャージの音声とともに、大出力の光線がギャレン目掛けて撃ち上げられた。バーニングショットは、カチドキの必殺技の前に破れる。ギャレンは攻撃を受けて墜落し、変身も解除された。

「俺の渡したメタファクターは使わないのか？」

「これからだよ。変身」

絶望の中アカリは、最後の力を振り絞ってギルスに変身する。

ギルスが右足で回し蹴りを繰り出した。続いて腹を連続でパンチし、右回りで回転しながら両足で蹴る。かかとの裏が、カチドキの頭部に命中した。

ギルスは両腕に、ギルスクロウを生やす。そしてカチドキに刃を連続で突き立てた。

「はぁ……はぁ……」

「それで終わりか？　ただのギルスでは勝ち目はない。エクシードギルスになれ」

「なれたら苦労はしないよ……」

カチドキの左パンチ一発で、ギルスが吹っ飛ばされる。ギルスが倒れる。カチドキはそれを確認すると、ＤＪ銃を大剣モードへ変形させた。そしてゆっくりと近づいていく。

カチドキが大剣を横に繰り返し凪ぎ払った。ギルスはそれを、後ずさりしながら避けていく。だがギルスは、行き止まりまで追い詰められてしまった。ギルスはこれ以上後ろにいくことができない。

カチドキの斬撃が近づく。それを避けるため、ギルスはジャンプした。そしてギルスクロウを天井に突き立て、見下ろす形をとる。ギルスは天井をおもいっきり蹴飛ばす。その反動で飛び蹴りを放った。カチドキの顔に一撃を与える。

ところがこれも、まともにダメージを与えるには至らない。カチドキが大剣を振り上げた。ギルスはそれをもろに喰らう。

ギルスは地面に座る。カチドキは上段に構えると、一気に振り下ろした。ギルスは右腕を横にして顔の前に上げる。ギルスクロウが大剣を受け止めた。

「部位破壊」

カチドキが腕に力を入れる。するとギルスクロウが破壊された。勢いは止まらず、さらにギルスの右腕が切断される。断面から大量に血が噴き出した。

「あああああああああ!!!」

「勝負あったな」

ギルスは激痛に喘いでいた。また、地面に這いつくばってのたうち回る。カチドキはしばらくその光景を眺めていた。飽きが訪れたのか、まもなくカチドキは、殺す決意を固める。

カチドキは大剣を上段に構えた。そして高速で振り下ろす。当たったら打ち所に関わらず、出血多量で死は免れない。

しかしギルスはそれを、失ったはずの右腕で受け止めた。傷口から生えた新しい腕には、深紅のギルスクロウが輝く。それを皮切りに、全身への変化も起こった。全身にトゲが出現し、頭の角が三本となり、胸の中央には宝石が備え付けられる。

「ついにその領域へ辿り着いたか」

ギルスは新たに、エクシードギルスに進化を遂げた。
エクシードギルスが背中から赤い触手をほどいた。それを器用に操り、カチドキに連続で突き刺す。先程までとはうって代わり、今度は装甲に傷をつけていった。次に触手で地面を叩く。その反動で飛び出し、低空の飛び蹴りが、炸裂した。鈍重なカチドキに避ける術はなく、派手に吹き飛ばされる。

「これならいける！」

カチドキは相性の悪さを痛感した。そのため、より身軽なアクセルトライアルへ変身する。アクセルはギルスを上回るスピードで接近した。
ギルスが伸ばした触手をかわしつつ、アクセルが駆ける。ギルスの右手から、パンチが繰り出された。アクセルは身を屈み、それをかわす。そして突き上げるように、ギルスの顎を殴った。アクセルがギルスを飛び越える。そして振り向き様に回し蹴りを放ち、ラッシュに続けた。その猛攻は凄まじく、ギルスに反撃の隙を与えない。
するとギルスが突然、アクセルに抱きついた。それから、二本の赤い触手を、アクセルの背中に突き刺す。

「捕まえた！」

ギルスが両方の腕を外側に開いた。アクセルは解放された代わりに、胸部を深々と切り裂かれる。ギルスは触手を自在に動かして、アクセルを何度も地面に叩きつけた。
アクセルトライアルは圧倒的な素早さと引き換えに、耐久が大幅に犠牲となっている。一連のギルスの攻撃は、アクセルに大ダメージを与えた。
エクシードギルスが必殺のかかと落とし―エクシードヒールクロウ―を発動させる。以前より増した破壊力は、アクセルを仕留めるには充分すぎた。

ギルスは元の姿に戻ると、リョウに歩み寄る。

「見事だアカリ。褒美として襲撃の日の真相を教えてやる」

襲撃の数時間前まで、カイトたちは研究に明け暮れていた。作業が一段落すると、少し休憩に入る。そのため、ミラは全員分のコーヒーを煎れに行った。そのとき、カイトのコーヒーにだけ睡眠薬を仕込んでいた。

それを飲んだカイトは、あっという間に眠りに落ちる。六人はカイトが熟睡するまで、しばらく待った。そして一時間が経った頃に、ようやく行動に移す。

六人は一斉に、研究所を荒らし始めたのだ。窓ガラスや試験管を片っ端からすべて割り、床には危険な液体をこぼし落とした。保管されているはずのライダーツールを、軒並み奪った。

仕上げにカイトを床に寝かせ、六人は研究所から出ていった。それからわずかして、アカリが研究所に足を踏み入れたのである。

「最初からお父さんや私を利用してたのね……絶対に許さない」

アカリはリュックサックから、オートバジンのハンドルを出した。それにミッションメモリーを差し込むと、赤い光の刃が伸びてファイズエッジに早変わりする。

アカリはそれで、リョウを縦に切り裂いた。亡骸からアクセルドライバーやカチドキロックシードを漁ると、彼女は最上階へ向かう。残る敵はあと一人だ。

最終話　原初コンプリート

クローズチャージとディケイドが激闘を繰り広げる。クローズはツインブレイカーから、ビームを撃った。ディケイドが軽快なフットワークで避ける。右手にビートクローザーを持って、クローズは走った。そして飛び上がり、勢いをつけて振り下ろす。ディケイドは一歩退いて避けた。それから、クローズにアッパーを喰らわして打ち上げる。

ディケイドはアタックライドブラストのカードを装填した。銃を真上に構え、光線を発射する。クローズはベルトにタカフルボトルを差し込み、レバーを降ろす。

翼を得たクローズは、ディケイドの銃撃を難なくかわした。さらにツインブレイカーをアタックモードに変形させ、ドラゴンゼリーをそれに差し込む。そしてディケイドとの距離をぐんぐん縮めていく。

ディケイドがドライバーに、アギトのカードを読み込ませた。さらにもう一枚入れる。

するとディケイドの姿が、アギトフレイムフォームに変わった。体色は赤く、主に右半身を強化された形態で、フレイムカリバーを扱って戦う戦士だ。

すれ違い様に突き刺そうと目論むクローズ。加速をつけたクローズは、アギトの背後を狙う。アギトにはクローズの居場所がわかっていない。

クローズがどんどん迫る。そのとき、おもむろにアギトが振り向いた。そしてなんの迷いもなく、剣を地面と垂直に振り下ろす。クローズはその身を焼かれながら、地面に叩きつけられた。

「気づいていないとでも思ったのか？」

「そんな……！」

「絶望に包まれたまま死ね」

アギトはケータッチを取りだした。それのパネルを押していく。

その力によって、ディケイドは歩くライダー図鑑こと、コンプリートフォームに強化変身を遂げた。
ディケイドがクローズの首を持ち上げる。それから、膝蹴りを三回繰り出した。一発の威力が凄まじく、クローズは抵抗することができない。ディケイドがクローズを投げ捨てる。ディケイドはそのあと、銃を発砲して追い討ちをかけた。クローズは変身を解除される。
ディケイドがパネルを操ると、彼のとなりにカブトハイパーフォームが現れる。カブトはパーフェクトゼクターを召喚した。さらに、ザビーゼクター、ドレイクゼクター、サソードゼクターを呼び寄せて取り付ける。二人はボロボロのマナに銃を向けた。

「体が……動かない……」
「死ね」

ディケイドとカブトが、超強力なビームを撃ち放つ。その威力は凄まじく、マナのみならず１０ｋｍ先まで破壊した。役目を終えたカブトが消える。

「オーバーキル……だったかな」

ブラッドスタークが後ろから、スチームブレードでディケイドを斬る。しかしほとんどダメージを与えられない。スタークは顔面にパンチを受ける。続けてディケイドが、腹部に連続パンチを叩き込んだ。

「液状化で攻撃を避けていたのか。マナ」

ディケイドは、スタークの取った行動を看破した。ライドブッカーを振り回し、スタークに何度も斬撃を浴びせる。
ディケイドの左腕から、エルボーが繰り出された。スタークは再び吹っ飛ばされる。変身状態が保てなくなり、マナの姿に戻った。

「負けてたまるか……！」
「威勢のよさと粘り強さだけは褒めてやる」
「調子に乗りやがって……」

マナがビルドドライバーを腰に巻く。ラビットタンクスパークリングをはめ込み、ハンドルをぐるぐる回した。

「変身！」

マナは仮面ライダービルドラビットタンクスパークリングフォームに変身した。

「グリスやクローズチャージ以下の性能で何ができる？」

ビルドが右足で地面を蹴り、一瞬で近づいた。その勢いを殺さず、タンク側の腕でパンチを繰り出す。ディケイドもパンチで反撃した。顔を左に傾けて、ビルドがそれをかわす。それからビルドは、ディケイドの左腰を蹴った。

ディケイドがわずかにのけぞる。ビルドはその隙を見逃さない。彼女は前に走りながら、連続でディケイドを殴る。ディケイドがビルドの胸部に、真っ直ぐパンチした。ビルドはなんとか耐えきると、その腕を両手で掴む。そして後ろに投げ飛ばした。

ディケイドはすぐに立ち上がり迫る。ビルドはディケイドの顔にホークガトリンガーの銃口を突きつけた。引き金を引き、零距離から弾丸を放つ。ディケイドは吹き飛ばされ、地面を転がった。

「どういうことだ？」

ディケイドは理解できなかった。なぜスペックで劣るビルドに、これほど追い込まれるのかを。カツラギの耳にも、その言葉が届く。彼

は数秒考え込んだ後、とある結論を捻り出した。

「そうか！　マナはスクラッシュドライバーの使用と極度の怒りによって、短時間でハザードレベルを一気に押し上げたんだ！」

「なるほど面白い、こんな戦いは久しぶりだ」

ビルドとディケイドがお互いに、右手でパンチを繰り出した。それぞれの顔に当たる。ビルドが左手で、もう一度パンチした。ディケイドはそれを、身を屈めて避ける。さらに、ビルドへタックルを仕掛けてた。ビルドは転ばされる。

馬乗りになったディケイドが、ビルドの顔を連続で殴っていった。ビルドは後転し、両足でディケイドの後頭部を蹴る。ディケイドは吹っ飛ばされながらも、正確に銃撃を浴びせた。

「はぁ……はぁ……」

「次の一撃が最後だ……！　どう転ぼうともな……」

ディケイドがケータッチを操ると、横にブレイドキングフォームが現れた。手には重醒剣・キングラウザーが握られている。ディケイドも剣を持ち、二人が構えた。

ビルドはドリルクラッシャーと、イクサカリバーを手に持つ。ドリルクラッシャーにフェニックスフルボトルを差し込み、ハンドルを回した。

三人が一斉に駆け出す。ディケイドのディメンションスラッシュとイクサジャッジメントが、ブレイドのロイヤルストレートフラッシュとボルテックブレイクが、激しくぶつかった。

力勝負では、劣勢に陥るビルド。だが、マナの思いが、さらなる力をビルドに与えた。ビルドは渾身の力で、二人の得物を弾き飛ばす。そしてがら空きになった胴体を、真横に切り裂いた。ブレイドの実体が消え、ディケイドは爆発する。

「やったよ！　お父さん！」
「成長したな、マナ」
「でもまだ戦いは終わってない。アカリが心配だ……」
「そうだな。だけどその前に、アジト内の研究所に寄るぞ」
「研究所……？」

頂上には首領が待ち受ける。アカリの姿が見えると、彼は椅子から立ち上がった。

「やって来たか。はじめまして」
「前に一度戦ったでしょ」
「だけどこうして話すのは始めてではないか。まぁいい、念のため聞くが用件はなんだい？」
「お前を倒す」
「戦力差を見極められないとは、バカなやつだ」
「どうして日本は腐っていると思うの？」
「迷走しているからさ。さて、談話は終わりだ。せいぜい楽しませてくれよな。変身」
「私はそう思わないけどね。変身」

首領はクウガマイティフォームに、アカリは仮面ライダーアクセルに変身した。
アクセルがエンジンブレードを縦に振るう。素早い身のこなしでクウガは、斬撃を斜め左に避けた。そこからクウガが、アクセルを殴る。アクセルは攻撃を耐え、剣を横に振った。
クウガが瞬時に、タイタンフォームになる。アクセルの斬撃は、強固な装甲に阻まれた。彼女が今度は、縦に切り裂く。剣筋は胴体を越え、ベルトまでかすめた。クウガの動きが一瞬止まる。そのあと、強めにアクセルの顔面を殴った。

クウガがエンジンブレードを掴む。手からエネルギーを流し込まれ、タイタンソードに姿を変えた。
アクセルがベルトのグリップを回す。すると、全身が赤い熱気に包まれた。ジャンプし、ライダーキック―アクセルグランツァー―を繰り出す。クウガの体に、稲妻が走った。ライジングタイタンフォームに変化して、身一つで攻撃を耐えきる。跳ね返され、アクセルは吹っ飛ばされた。
クウガが剣を片手に、悠然と歩き始める。アクセルはギャレンラウザーに、ファイアとバレットのカードを読み込ませた。そして、銃から火炎弾を撃ち出す。ところが、クウガに効果はない。
間合いに入ったクウガが、剣を突き刺した。アクセルはアクセルトライアルに変化する。そして素早く、クウガの背後に移動した。刺突を避けながら、マキシマムドライブを発動する。
彼女がトライアルメモリを真上に投げた。クウガがまだ振り向かない内から、連続キック―マシンガンスパイク―を叩き込む。一発の威力は低いが、着実に傷を負わせていった。
蹴り終わるとすぐ、アクセルはクウガから離れる。間合いを取り、クウガの反撃を未然に防いだのだ。クウガがライジングマイティフォームに変わる。アクセルは、ファイズに変身した。
クウガが構える。必殺キック前の精神集中だ。ファイズも負けじと、メモリーの付いたファイズポインターを、右足に取り付ける。そして二人が飛び上がる。
空中で、二人のライダーキック―ライジングマイティキックと、クリムゾンスマッシュ―が炸裂した。力は互角であり、彼らは地面に落ちる。
ファイズが膝立で、フォンブラスターを撃った。クウガはライジングペガサスになると、ライジングペガサスボウガンを射る。両者の攻撃が、お互いの身体を傷つけた。
「とっておきを見せてやる!」

するとファイズが、ベルトを戦極ドライバーに替えた。そこにカチドキロックシードを装填し、ブレードを倒す。アームズが天から降ってきて、彼女は鎧武カチドキアームズへと進化した。
召喚した火縄大橙ＤＪ銃を、鎧武が撃ち放つ。クウガは超感覚でかわしたため、直撃は免れた。だが、彼の後方は辺り一面、粉々に砕かれる。鎧武は次に、斜め上に銃を構えた。発砲し、天井を壊す。瓦礫が次々と、クウガに降り注いでいった。
クウガはライジングドラゴンになる。それを活用して、瓦礫の雨をすべて避けた。さらに、落ちてきた細長い破片を掴み、ライジングドラゴンロッドに変える。鎧武は銃を投げ捨て、背中の二本の旗を取り出した。クウガの刺突や凪ぎ払いを、強固なボディで受けきる。鎧武が旗を振り回すと、部屋全体を飲み込む竜巻を生み出した。回避不能の攻撃が、クウガを襲う。

「ここからが本当の勝負だ」

クウガの周りが、漆黒の闇に覆われた。瓦礫の山を吹き飛ばし、中からクウガアルティメットフォームが姿を見せる。鎧武が火縄大橙ＤＪ銃を放った。クウガはジャンプしてかわす。それから、落下の勢いを利用して右手で殴った。銃を横にして、鎧武は防ぐ。しかし威力は計り知れない。鎧武は後退りを余儀なくされた。
クウガが両手から、光弾を乱射する。鎧武は攻撃に晒された。彼女は旗を両手に持つ。はためかせ、光弾を跳ね返していった。
両者が走り出す。そして二人が、パンチを繰り出した。お互いの拳がぶつかり、反動で強風が吹き荒れる。クウガが低く跳んだ。両足で挟み込むように、鎧武を蹴る。痛みに耐えながら、彼女は無双セイバーを召喚した。両脇でクウガの足を掴み、左足に突き刺す。
クウガは地に足をつけた。連続で、鎧武が斬撃を浴びせる。五発喰らったあと、クウガが至近距離から光弾を放った。威力は絶大であり、鎧武は吹き飛ばされる。
クウガは助走をつけ、高く跳び上がり、宙で一回転した。鎧武に両

足ドロップキック―アルティメットキック―を発動する。鎧武は爆発し、変身も解除された。

「そんな……カチドキアームズでも敵わないなんて……」

「これで終わりだ」

横から黄色いオーラが飛び出し、クウガを吹き飛ばした。アカリが振り向く。そこにいたのは、バロンレモンエナジーアームズだった。

「誰……？」

「私だよ」

「お父さん!?　どうして？」

「カツラギ君の娘さんに、彼もろとも助けてもらったんだ。本当に強くなったな。父としてこれほど嬉しいことはない」

バロンの奥から、カツラギとマナの姿が見える。

アカリが出発してすぐ、カイトは組織に誘拐されていた。そしてアジト内の研究所に連れていかれ、無理矢理発明をさせられていたのだ。ところが、ディケイドを倒したマナによって、無事救出される。

バロンがソニックアローを射る。矢がクウガに突き刺さっていった。

「今まで私を騙していたのか。許してはおけないな」

バロンが矢を射ながら、クウガに接近した。右手のソニックアローで、上から斬りつける。バロンの両手を、クウガが掴んだ。手を強引に上げ、空いたみぞおちに膝蹴りを与える。

バロンの力が抜けた。クウガは一歩引き、肩からタックルを喰らわす。バロンは吹き飛ばされ、マナたちの足下に落ちてきた。変身も解除される。

マナがカイトに駆け寄った。彼女はカイトから、戦極ドライバーと

マンゴーロックシードを受け取る。

「やはり敵わないか……」

「あとは私に任せてください。変身！」

それを使い、彼女はバロンマンゴーアームズに姿を変えた。

「死ね！」

クウガが右掌から、漆黒の光線を撃つ。アカリは左に側転して、それをかわした。そして、バナナロックシードを、戦極ドライバーにはめる。

「変身！」

アカリが鎧武バナナアームズへ変身する。バナスピアーを召喚して、敵目掛けて突き刺した。しかし呆気なく受け止められる。

バロンがクウガの左横から、マンゴーパニッシャーを振り下ろす。クウガは後ろにバク転して避けた。一歩踏み込んだ鎧武が、バナスピアーを凪ぎ払う。まだ着地前だったため、クウガは投げ飛ばされた。

クウガは地に足をつけると、黒のタイタンソードを二振り生み出す。一瞬で二人に近づき、腕を外側に開くように斬りつけた。

二人は激痛に耐えると、クウガの腹部を蹴った。さらに、上段に構えた得物を、勢いよく振り下ろす。

鎧武とバロンがカッティングブレードを倒した。得物にエネルギーが溜まり、黄色く輝く。二人はそれを、渾身の力で突きつけた。クウガは二振りの剣の鍔で、必殺技を受け止める。一度腕を縮め、素早く伸ばした。その衝撃で、二人は吹っ飛ばされる。

クウガは次に、黒いライジングペガサスボウガンを生み出した。二人に向かって、空気弾を放つ。鎧武は武器を捨て、バロンの前に躍り出た。そして、メロンアームズに変身し、メロンディフェンダーで防

ぎきる。そのわずかな間に、バロンはディケイドに変身した。先程の戦闘で獲得した、ディケイドライバーを使ってだ。
鎧武はカッティングブレードを倒したあと、メロンディフェンダーを投げつけた。それが目眩ましとなる一瞬の隙に、鎧武がエクシードギルスとなる。
エクシードギルスが膝蹴りを繰り出した。クウガは左足を軸に、時計回りに回転してかわす。そのまま、右足で蹴った。クウガの右踵が、エクシードギルスの右腰に当たる。
続いてディケイドが飛びかかる。ライドブッカーで銃撃しながらだ。間合いが狭まると、クウガを連続で斬りつけた。
しかしすべて、クウガの左手でいなされる。ローキックされ、ディケイドは転ばされた。クウガはディケイドを二度踏み潰し、そのあと蹴り飛ばす。

「もらった!」

エクシードギルスが、クウガの上から降ってきた。両足の踵の爪を、背中に突き刺す大技―ダブルエクシードヒールクロウ―を放ったのだ。
エクシードギルスがクウガの胸を蹴る。その反動で一回転し、綺麗に着地した。
ビルドは新しい武器を持っていた。その名はフルボトルバスター。カツラギがアジトに拉致されてから、無理矢理作らされたものだ。最終調整が間に合っていなかったため、完成したのはついさっきである。彼女はディケイドを撃破したあと、アジト内の研究所までこれを取りに行っていたのだ。
ビルドがその武器に、タカとニンジャのフルボトルを装填する。引き金を引き、強力なビームを発射した。その攻撃は、クウガを包み込む。
エクシードギルスはベルトを取り替え、鎧武カチドキアームズにチェンジした。鎧武は火縄大橙ＤＪ銃に、オレンジロックシードを取

り付けた。そしてトリガーを引く。凄まじい破壊光線がクウガを襲った。

「小癪な！　こうなれば奥の手を見せてやる」

クウガが黄金色の光に包まれた。それによって、二人の攻撃が掻き消される。中では全身が太ましくなり、肩が巨大化していった。やがて、光が集束していく。そこから現れたのは、金色のクウガ―ライジングアルティメット―

クウガが恐るべき素早さで走る。そして、鎧武に右腕でエルボーをかました。鎧武は吹っ飛ばされる。

ビルドがフルボトルバスターを乱射した。それらは一発残らず当たったが、クウガには傷一つつけられない。

「アカリ！　出発の時に渡したロックシードを使え！」

カイトが大声で叫んだ。アカリはそれを耳にすると、謎のロックシード―極ロックシード―を取り出した。フェイスプレートが、合体用ジョイントに変貌する。

鎧武はその錠前を解錠し、カチドキロックシードの穴に差し込んだ。ロックシードが捻られると、すべてのアームズが現れる。それらが鎧武に合体すると、カチドキの装甲が吹き飛ぶ。中から現れたのは白銀の鎧武―仮面ライダー鎧武　極アームズ―

鎧武はベルトを操り、影松真を召喚する。それを手にし、クウガに詰め寄った。得物を横に薙ぎ払う。わずかに後退し、クウガはかわした。鎧武は持ち換え、刃の位置を引っくり返す。そして束で突いた。

クウガがパンチを放つ。それをメロンディフェンダーで防いだ。鎧武が盾を前に突き出す。クウガの視界が覆われた。その隙に、大橙丸で×字に斬りかかる。

クウガが右手をかざした。盾が瞬時に燃えて消滅する。彼は体を横に向け、左足で蹴った。衝撃で鎧武は後退る。彼女はブドウ竜砲を

手に持った。撃鉄を引き、クウガ目掛けて発砲する。ところが弾はすべて、左手で弾かれた。
二枚のキウイ撃輪を召喚すると、まるでフリスビーのように投げる。
クウガは真っ黒なライジングドラゴンロッドを生み出した。そしてそれを使い、撃輪を打ち返す。鎧武はすれ違いざま、斬られてしまった。

「逆転の一手を掴みかけたんだけどな……」
「いや……まだ終わりじゃない！」

ディケイドが、ケータッチを操作した。すると姿が、ディケイドコンプリートフォームへ変化する。そのあとバックルを右腰につけ直し、ケータッチをドライバー中央部にはめた。
クウガは今この瞬間、ツカサの死亡を知る。動揺している隙に、ディケイドがアギトシャイニングフォームを呼び出す。そして、Wライダーキックを繰り出した。クウガは二人の足を掴み、地面に繰り返し叩きつける。
鎧武が正面からブドウ竜砲を放ち、注意を向けた。クウガは二人を投げ捨てる。それから、鎧武に走り寄った。一発アッパーパンチを喰らい、鎧武は打ち上げられる。
ディケイドは次に、ファイズブラスターフォームを呼び出した。フルボトルバスターにライト、ロケット、ダイヤモンド、掃除機のフルボトルを入れる。そして引き金を引き、強力なビームを炸裂させた。ファイズも同時にファイズブラスターから、フォトンブラッドの光弾を発射する。クウガは右足を高くあげ、一回転半した。蹴りの衝撃で砲撃がかき消される。
クウガが右腕を伸ばし、掌を向ける。自然発火能力が発動されファイズは消滅、ディケイドも大ダメージを負った。
鎧武はギャレンジャックフォームに変身する。空中で自由自在に動けるようになった。ドロップとファイアのカードをラウズし、バー

ニングスマッシュを発動させる。ギャレンはクウガ目掛けて上空から、両足を発熱させて急降下した。
クウガが右拳に力を込め、斜め上にパンチする。打ち負けたギャレンは、ディケイドの倒れていた場所に、突っ込まされた。

「私は今まで、クウガの恐るべき点は身体能力の高さにあると思っていました。しかし、本当に脅威なのはその回復力」
「確かに……。これまで私たちは何度も必殺技を放ったのに、やつはピンピンしたままだ」
「しかし奴も人間です。痛みをまったく感じないわけではないし、精神面の疲労は避けられない。だからその隙を見極め、特大の一発で仕留めましょう」
「わかった」

言い終わると、ギャレンはガタックに変身した。クロックアップを起動し、クウガに詰め寄る。自分が囮になるという強い決意が見られた。
ガタックは四方八方から、ダブルカリバーによる斬撃を浴びせる。ところが、クウガの半径十メートルが爆発した。ガタックは巻き込まれ、吹っ飛ばされる。
その頃ディケイドは、電王ライナーフォームを既に呼び出していた。二人が剣を構えて走る。そして電車斬りとともに、四本のフルボトルを装填したフルボトルバスター剣モードを、斬り払った。瞬間、三人を爆風が包み込む。

「やったか?」

爆風が晴れる。ディケイドとクウガは、背を向けて立っていた。しばし静寂に覆われる。一秒後、ディケイドは膝から崩れ落ちた。さらに変身が解除される。
ガタックが彼女へ近寄った。

「まだだ……！」

息が多少荒くはなっている。しかしクウガはまだ立っていた。

「すまない……駄目だった……」

「いや、そうでもなさそうです」

その発言の意味を、マナは理解できなかった。しかし次の瞬間、実証によって明らかとなる。クウガが突然アマダムを抑え、苦しみ始めたのだ。二人は注意深く観察する。すぐさま、ヒビが入っていることが確認される。それはすなわち、回復能力の打ち止めを意味していた。

機を見逃す二人ではない。ガタックはエクシードギルスに変身した。背中のギルスステインガーで、クウガを串刺しにする。

マナはビルドラビットタンクスパークリングフォームに変身した。フルボトルバスターにラビット、タンク、ドラゴン、ロボットを入れたあと、大剣に変形させる。

ギルスはさらに、鎧武極アームズになった。それから、火縄大橙DJ銃、無双セイバー、大橙丸を合体する。カッティングブレードを三回倒したあと、完成した薙刀にカチドキと極ロックシードを取り付けた。

二人はそれぞれ、薙刀や大剣を持って走る。クウガの放つ光弾をものともせず、その足を止めない。そして斬り込む……いや、特攻という表現の方が近いか。

二人の背後で、クウガはV字に火花を散らしている。まもなく、壮絶な断末魔と共に爆発した。

「許さんぞ……貴様ら！　このアジトごと道連れにしてやる……」

「ならばその前に脱出するまで」

そう言うとビルドは、フルボトルバスターを銃にした。光弾を放って、壁に穴を開ける。ビルドはホークガトリングフォームに、鎧武はギャレンジャックフォームに変身した。カツラギとカイトを連れて飛び立つ。

数分後、ビルは粉々に破壊された。火柱が天高くそびえ立つ。二人はそれを確かめ、地面に着地した。

アカリとマナが変身を解除する。アカリはそのあと、カイトに問いかけた。

「お父さん。どうしてライダーツールの研究を始めたの？」

「シオリを……アカリのお母さんを生き返らせるためだ」

彼女の遺体は、研究所地下の冷凍室に安置されている。その事はアカリも知っていたが、遺体の劣化を防ぐため、立ち入りを禁止されていた。おかげで、彼女は生前と変わらない姿で眠っている。

「そんなことできるの？」

「仮面ライダーの超人的な力は元々、死者に生命力を与えようとした結果なんだ。生者に対する実験は、これまで何度も成功してきた。だけど死者に対しては、動物実験でさえ一度も成功していないんだ……いや、違う。私はずっと、現実から目を背けてきただけなのかもな。無意味な研究に付き合わせてごめんな」

「そんなことないよ！　実験は私の好きでやって来たんだから」

親子の会話に、カツラギが割って入る。マナは空気を読んで、彼を止めようと試みた。ところがその前に、彼の口が開く。

「死者のために用いることは難しいと思います。だけど生者のために使うことはできるではありませんか」

「そうですけど……」

「今を生きる人々のためにその技術を活かしませんか？　私も協力し

ます」
「……わかりました。あなたは技術も人格も信頼できます。よろしくお願いします」
アカリが言葉を発する。
「二度とあんな頭のおかしいやつらに使われないようにね！」
だんだんと空が明るくなる。その度、カイトの心のもやも晴れていった。
再び同じ過ちを繰り返さない。昇る朝日に、四人は強く誓った。

特別話　不死身の細菌

事件から二年の月日が流れる。被害に遭った街の復興も終わり、徐々に忘れ去られていった。

しかし仮面ライダーの存在は、都市伝説として残る。英雄説や陰謀説やＵＭＡ説などが、今なおまことしやかに囁かれていた。

あのあとアカリとマナは、必死に勉学へ励み二人とも三多鋤高校に進学していた。その後も問題なく進級して三年生になり、日々を生きている。

入学してから、二人が同じクラスになったことはない。部活は違い、登校時間も異なるため、学校内で話すことはほとんどなくなっていた。

「おはようございます！」

アカリは毎朝、いの一番で朝練に向かう。

顧問の先生と挨拶を交わし、部室の鍵を預かる。これが彼女の習慣だ。

アカリがテニス部を選んだのは、軽い気持ちからだった。なんとなく楽しそう。それだけだ。

そして鬼のような練習量に、何度も打ちのめされた。同期との実力も引き離され、才能なしとの評価を周りから突きつけられた。

三多鋤高校テニス部は、県大会常連校である。しかしそこまで。毎年、一回戦か二回戦で敗退している。

昨年、先輩が敗れるところを見て彼女は、来年こそは全国大会に出場したいと、強く願った。彼女は練習を重ね、どんどん実力をつけていき、ついにはエースにまで上り詰めた。

才能なしとの烙印を押された、あの頃の彼女はもういない。

部室に入るとまず彼女は、テニスウェアに着替えた。他の部員が来る前に、テニスコートの準備を済ます。ぼちぼちと他の部員もやって来た。

朝練はまず、ランニングから始まる。校舎を十周するのだ。五月とはいえまだ、外はうすら寒い。だけど走り終わる頃には、全身から汗が吹き出していた。
それが終わると次は準備体操。それから、ラケットを使う練習に切り替える。
いつもこのくらいで、時間が訪れる。彼女たちは部室に戻り、制服に着替えた。
部室の鍵は、一年生が交代で返しに行く。鍵当番を遅刻させるわけにはいかない。そのため、彼女たちは足早に、部室を飛び出した。
教室に戻る途中、アカリが話しかけられる。それは親友のサクラコだった。
一年生の時から同じクラスで、休日もよく遊ぶ。実力ではアカリに劣るが、彼女はサクラコのことを、とても大事にしていた。

「アカリ、話があるから、放課後いい？」
「教室に帰ったあとじゃダメなの？」
「ダメ。わかった？」
「うん」

チャイムが鳴り始める。二人は急いで、二階に駆け上がる。そして、教室に突っ込んだ。
先生はもう、前に立っている。まもなく、チャイムが鳴り終わった。
二人はドアの前で、手を膝に添えて荒く、呼吸を整える。

「チャイムが鳴り終わる前に着席していないと遅刻だ」
「そんな！」
「だけどまあ、お前らの事情は俺も知ってる。次は気をつけろよ」

このやり取りは何回目だろうか。二人は頭の中で、そう思った。彼女等が席につく。
アカリの席は、窓際の前から三番目で、サクラコはその一つ前だ。

それを見届けたあと、先生が話し始めた。
「これから抜き打ちで持ち物検査始めるぞ！」
「そんな！」
アカリの声に反応して、サクラコが振り向いた。
「なにかまずいものでも持ってきたの？」
「えっ……あっうん。なんというか漫画をね……」
アカリはスクールバッグから、黒い袋を取り出した。
先生は、アカリから見て一番右前の生徒に、詰め寄る。その隙を見計らい、窓に袋を放り投げた。
袋は木々を抜け、テニスコート横の草むらに落ちる。落下音などは一切、鳴らなかった。
「あの中に入ってたの？」
「まあね」
「あとで読ませてね」
「うーん……えっ……エロいけど大丈夫？」
「バカ！」
「苦手か」
「次からは朝一番に読ませなさい！」
クラスメートがお喋りに更けていると、先生の怒号が沸く。
その矛先は特に、アカリたちに向けられた。教室に静寂が訪れる。
先生は一呼吸置くと、再び検査を再開した。
途中で何人かのバッグから、ゲームやアクセサリー類を発見される。それらはことごとく没収され、生徒は怒鳴られた。
検査は続く。いよいよ、次はアカリの番だ。
机に乗るスクールバッグを、先生がくまなく見渡す。中からは、い

かがわしい表紙のライトノベルが発見された。

「これはなんだ？」
「小説です。ダメですか？」
「官能小説は認めない」

どうやら先生は、ラノベに詳しくないようだ。彼女は叱られ、本は没収された。

「嘘だー」

その後授業がすべて終わり、部活の時間になった。アカリは急いで鍵を取りに行き、部室を開ける。
ところが、なかなか他の部員がやってこない。
アカリは着替えて、テニスコートに行く。すでに部員は、そこに全員揃っていた。ただし、皆制服姿だ。

「どうしたの？」

アカリが首を傾げる。すると集団の中から、サクラコが出てきた。彼女は静かに、そして冷たく、思いをぶつける。

「アカリ、部活辞めてくれない？」
「えっ？　どうして？」
「あんたの練習がキツすぎるから。もう限界」
「だって全国目指すって……」
「だけど！　行きたいけど！　みんなあんたみたいな天才じゃないの！」
「私が……天才？　何言ってるの？　そんなことあるわけないよ」
「才能ある奴ってほんとムカつく。普通の人はあんなに練習出来ないから」

「そんな……納得できないよ！」
「別に理解して欲しいとは思ってない。私たちはただ、あんたに辞めて欲しいだけ。邪魔なの」
「だって……！」
「先生には私が伝えておくから。あんたはさっさと、荷物持って帰りな」

そのとき、近くから悲鳴があがった。
その場の全員が、コートの外に視線をやる。彼女等の目には、逃げ惑う生徒と、追いかける化け物が写った。
校内に二体のアンデッドが出現したのだ。悲鳴が悲鳴を呼び、辺りがパニック状態となる。
テニス部のメンバーも、一目散に逃げ出した。最後尾には、アカリの姿もある。
群衆は走って、左に曲がった。一人アカリだけが、右に向かう。他の部員に気づかれぬよう、そっと。
アカリはそこで、先程投げた黒い袋を回収した。それの口を開ける。
中には新製品のマッハドライバーと、シグナルバイク類が入っていた。
アカリは走りながら、ベルトを腰にあてる。そして、アンデッドの前に躍り出た。
「変身するのは久しぶりだね。いくよ！　変身！」

ドライバーにシグナルマッハを装填する。アーマーがあてがわれ、アカリは仮面ライダーマッハに変身した。
アンデッドたちが駆け出す。マッハはゼンリンシューターを撃った。弾丸が、敵の頭部に命中する。
「まずはお前からだ！」

一体のアンデッドに、集中的に射撃を浴びせる。もう一体が接近してきた。
マッハは武器を離し、後ろにばく転する。そのとき銃を蹴り上げ、アンデッドの顎に当てた。
怯む敵を、マッハのパンチが襲う。敵は吹き飛ばされ、もう一体と衝突した。
彼女がゼンリンシューターを掴む。一回転しながら武器の後部に、シグナルマッハを差し込んだ。

「くらえ!」

マッハが引き金を引いた。ゼンリンシューターから、無数の光弾が撃ち出される。前方のアンデッドは爆発した。

「こいつは私が!」

校舎の屋上から、仮面ライダービルドが飛び降りる。彼女は、手にしたシンゴウアックスで、もう一体のアンデッドを一刀両断にした。

「やるじゃん」

マナは文学部に所属している。
活動内容は、小説を書いたり読んだり、共通の趣味を持つ部員と話したりと自由だ。
アカリからテニス部を誘われたこともあったが、自分には合わないとして断っていた。
事件が解決したあと、カツラギ家は引っ越した。場所は、カイトの家の隣だ。そして家族ぐるみの生活を送っている。
二年の月日は、二人の友情をさらに強固なものへと変えていた。

「マナ、こいつらなんなの？」
「わからない。だから調べてみるね」
「調べる？」
「死体を研究所に持っていく。腐ってしまったら元も子もないから、私は帰るね。アカリは残って生徒の安全を確保してなさい」
「うん。危なくなったら言ってよ」

そう言うと、ビルドは両肩にアンデッドを抱え、立ち去った。
それを見送ったあと、マッハが辺りをキョロキョロ見回す。
誰もいないことを確認し、彼女は変身を解除した。

「私が仮面ライダーだとバレたくないな……」

スマホを持った生徒が一斉に、アカリの下へ駆け寄る。

「あなたが倒したんですね！」
「写真撮りました！」
「一部始終を動画に収めてます！」
「そんなー！」

目まぐるしく変化する状況に、アカリは頭が追い付かない。
彼女は思考停止で逃げ出した。生徒たちがあとを追う。
アカリはテニスウェアのまま、荷物も回収せず、学校を飛び出した。

ビルドが校舎から離れる。
彼女はアンデッドを地面に下ろし、ビルドフォンを取り出した。それにライオンフルボトルを入れ、マシンビルダーに変形させる。
彼女はアンデッドを、バイクの後ろに縄でくくりつけた。そしてバイクに跨がり、発進させる。

幸い、道は空いていた。そのため、彼女は十分足らずで、研究所へ到着する。
エンジン音が聞こえたからか、中からカツラギが出てきた。
「どうしたんだ？」
「早くこれを調べて！」
「死体!?　わかった。すぐやる」

カツラギとマナが、アンデッドを持ち上げる。
靴も脱がずに玄関を越え、階段を登り、真っ正面のドアを開けた。
中はベッドと椅子、机とパソコンだけのさっぱりした部屋だ。
二人はアンデッドをベッドに乗せる。身体中に電極を取り付け、コードをパソコンと接続させた。

「どうなの？」
「マナ……二年前、インベスやミラーモンスターがいたことを覚えているか？」
「うん。アジト内の研究所で作られていたんだよね」
「こいつはそいつらと似ている。断定するにはいささか早いが恐らく同種、あそこで作られた可能性が高い」
「でもアジトは爆発したじゃない」
「その通りだ……だけどこれは、Ｍを使ったとしか思えない。きっとどこかにあるんだろう」
「Ｍ？　天才ゲーマーの？」
「お前が何を言っているのかわからないが、Ｍとはモンスター生成装置の略称だ。ｍｏｎｓｔｅｒ　ｍａｋｉｎｇ　ｍａｃｈｉｎｅの頭文字を取って名付けられたんだ」

モンスター生成装置とはその名の通り、化け物を生み出す機械のことだ。
手動で作ることも可能だが一番の利点は、学習しながら自動で作成

できることにある。
モンスターが倒される度、相手の力を分析し、より優れたモンスターを生み出すことが出来るのだ。
「そういうことね……」
ビルドフォンが鳴る。画面には、怪人出現の速報が流されていた。マナはそれに気づくと、すぐに出発する。
バイクを走らせること五分。マナは現場に着いた。そこは一面瓦礫が占め、死体が随所に横たわっている。
その惨劇を起こしたのは、二十体のグロンギだ。
「こいつらの発生源もMなの？　どっちにしろ倒さなきゃ。変身！」
マナはディケイドに変身した。
彼女はライドブッカーを剣にし、集団に突っ込む。彼女の刃が、グロンギを切り裂いた。
しかし同時に、後ろから蹴られる。
グロンギが彼女を囲む。そして暴力を浴びせた。彼女はカメンライドし、ブレイドジャックフォームに変身する。
ブレイドが飛び上がる。多くのグロンギは、ただ見上げるだけ。
しかし三体が、空中におどりでた。
一体は腕から、鋭い毒針は射出する。それが、ブレイドの胸に刺さった。
二体目は口に吹き矢のようなものを添え、弾丸を連続で放つ。ブレイドの翼に穴が開き、彼女は制御を失った。
彼女に三体目が近づく。三体目はトンファーで、ブレイドを叩きつけた。
地面から、二体のグロンギがジャンプする。彼らが同時に、ブレイドを蹴り上げた。
トンファー持ちのグロンギは、上空で待ち受けている。ブレイドが

どんどん近づいてくる。彼はブレイドを叩き落とそうと企んでいた。
ブレイドがカードを、ドライバーに装填する。
ライドブッカーが、稲妻に包まれた。彼女は振り返って、グロンギを切り裂いた。
致命傷を受け、トンファー持ちグロンギは爆死する。
ブレイドは次に、龍騎にカメンライドした。アタックライドアドベントで、ドラグレッダーを呼び出す。
蜂のグロンギが龍騎に、腕から毒針を撃った。
ドラグレッダーが龍騎を庇う。それから炎を吐き出した。蜂のグロンギが燃え尽きる。
ドラグレッダーは吹き矢のグロンギを、長い尻尾で叩き落とした。
地上に頭を強く打ち、吹き矢のグロンギは死ぬ。彼女はドラグレッダーに掴まり、一緒に地上へ戻った。

「数が多すぎる……」

ディケイドはケータッチを使い、コンプリートフォームにパワーアップした。
何体ものグロンギが、同時に襲いかかる。
ケータッチを使い、ディケイドは装甲響鬼を呼び出した。二人が剣を薙ぎ払う。五体のグロンギが倒された。
糸が吐き出される。ディケイドの、右足首に巻き付いた。鎌を持った敵が、飛びかかる。
振り下ろされる鎌に、ディケイドは斬り裂かれた。油断した敵の腹部に、イクサライザーを突きつける。そしてファイナルライジングブラストを発射した。

「全員ぶっ潰すまで倒れるわけにはいかない！」

光弾は鎌のグロンギを吹っ飛ばす。さらに巻き添えで、二体を余分に仕留めた。

サイのようなグロンギが、突進を仕掛ける。ディケイドは宙に投げ飛ばされた。
続いてバイクが突っ込んでくる。はねられたディケイドは、アスファルトに激突した。
バイクが落ちてくる。ディケイドは足を伸ばし、タイヤを受け止めた。

「ぐぬぬ……！　だぁぁ！」

他のグロンギが横から、彼女を踏みつける。彼女は渾身の力を足に込め、バイクを蹴り飛ばした。
サイのグロンギが、彼女の首を持ち上げた。顔面に何度もパンチを喰らわせたあと、地面に落とす。
酷いダメージを受け、マナの変身が解除されてしまった。
カブトムシのグロンギがマナの腰から、ディケイドライバーを奪い取る。マナは懸命に手を伸ばし、返すよう懇願した。
興味を示したのか、グロンギは注意深く眺める。相変わらず、マナへの踏みつけは変わらなかった。
やがて飽きたのか、ディケイドライバーが握り潰される。

「まだだ！」

ビルドドライバーを使い、彼女はビルドラビットタンクスパークリングフォームになる。
辺りの敵を蹴り飛ばした。両腕のトゲで、彼女はグロンギを斬りつける。ハンドルを回して飛び上がり、ライダーキック―スパークリングフィニッシュ―を繰り出した。
三体の撃破に成功する。だが、着地したところを狙われた。背後から、鋭い爪に引っ掛かれたのだ。
彼女は振り向き様、ドリルクラッシャーを薙ぎ払う。しかし逃げ足が速く、攻撃は外れた。

ビルドが武器を、銃に変形させる。そこにロケットフルボトルを挿し込み、ボルテックブレイクを発動した。引き金を引く。
爪のグロンギが逃げた。光線はどこまでも追尾していき、終には爪のグロンギを殺す。
生き残っているグロンギは五体。蜘蛛、サイ、バイク、バッタ、そしてカブトムシだ。カブトムシのグロンギは、これまで戦闘に参加していない。
蜘蛛のグロンギが口から、槍のような糸を吐き出した。
彼女はそれを、白羽取りする。折り曲げて奪い、逆に突き刺した。
蜘蛛のグロンギが命を落とす。
彼女の後ろから、サイのグロンギが突進した。同じ手は効かないと言わんばかりに、彼女はジャンプする。
空を昇る間、カイゾクハッシャーにエネルギーを充填した。そして上から矢を射る。
サイのグロンギは撃破された。
バッタのグロンギが跳び上がってくる。重力に引っ張られながら、両者は肉弾戦を展開させた。
ビルドのエルボーが決まる。バッタのグロンギは、地に音をたてて墜落した。
彼女も地上に降り立つ。止めを指すため、ハンドルを回して必殺技を発動させた。彼女がライダーキックを放つ。
バイク乗りのグロンギが突っ込んできた。両者は勢いよくぶつかり、弾き飛ばされる。グロンギのバイクが破壊された。
マナは変身が解かれ、地面にうずくまる。一方で、バイク乗りのグロンギは立ち上がった。
「ここまで……かな……」
バイクと化したアクセルが火炎を纏って、バイク乗りのグロンギを突き飛ばした。
続いて人形に戻り、エンジンブレードで斬り伏せる。攻撃を受けた

バッタのグロンギは死亡した。
アクセルは振り向き、マナを見る。
「どうして伝えてくれなかったの？」
「一人でいけると思った……まさかこんなに強いなんて……」
「あとは私に任せて」

グロンギの数は、残すところあと一体。カブトムシ型のグロンギを残すのみだ。
敵のパンチを、後ろにばく転して避ける。間を空けると、アクセルはトライアルメモリを取り出した。
それを使い、彼女はアクセルトライアルになる。
敵の目が青く輝いた。彼女はエンジンブレードに、エンジンメモリを装填する。ドライバーからメモリを取り外し、マキシマムドライブを発動させた。
アクセルは超高速で、エンジンブレードを連続で振るう。グロンギはそれを、何度もかわし続けた。

「こいつ……見切っているのか。だったら……！」

彼女は真後ろに、ハイキックを放つ。それは不発に終わるが、グロンギの動きが一瞬止まった。
予想外の動きをあえて行い、動揺を誘う作戦だ。
アクセルが剣を振り払う。グロンギは横に斬り裂かれた。
制限時間が過ぎ、アクセルの変身が強制解除される。アカリは吹っ飛ばされ、地面を転がる。
倒しきれたか不安な彼女は、恐る恐る顔を上げた。グロンギは突っ立っている。
しかし、一歩足を踏み出したとき、負荷に耐えきれず爆死した。

「危なかった……」

お互いの肩を支えあい、二人は帰路についた。体はボロボロのため、何度も転ぶ。
その都度立ち上がり、また足を進めた。その繰り返しの果てに、ようやく到着する。
マナの方が、怪我の具合は酷かった。疲労も溜まっていたため、彼女は自室のベッドに、寝かしつけられる。
アカリは眠い目を擦り、自宅のリビングに辿り着いた。カイトはそこでテレビを見ている。
彼女は彼に、ここまでの出来事を説明した。カイトもアカリに、カツラギが突き止めた事実を伝える。
部屋にカツラギが入ってきた。
すると驚愕の事実を聞かされる。なんでもアンデッドは、進化したバグスターウイルスによって、さらに強化されていたのだ。
彼は早口で、アカリに質問した。

「君は化け物をどの仮面ライダーで倒した？」
「どの？　ええっと……確かブレイブレベル５のはず」
「やはりそうか……バグスターウイルスはウイルスということだけあって、非常に適応力が高い。早く装置の場所を特定しないと大変なことになる……！」
「なに？　今回の事件は全部私のせいだって言いたいの？」
「誰もそんなことは言っていない！　カツラギ君はあくまで事実を述べただけで……」

カイトが必死のフォローを入れる。しかし、アカリには届かない。
彼女の顔は、みるみる青ざめていった。

「私にはもう、仮面ライダーである資格がない」

アカリは悔しそうに呟くと、家から飛び出してしまった。カツラギ

があとを追おうとする。
それをカイトが止め、彼までも出ていった。
カイトはガシャコンマグナムを召喚する。彼は銃口を上げて、引き金を引いた。銃声が夜の市街地に響く。
アカリは足を止め、振り向いた。
「誰もお前の責任なんて言ってない。早く戻ってこい」
「たとえ世界中が許しても、私は許せない。どうしてもというのなら、力ずくでお父さんも倒すよ」
「ならば私が勝てば戻ってこい。これで条件はフェアだ」
二人がゲーマドライバーを、腰にあてる。その中にライダーガシャットを挿し込み、レバーを開いた。
アカリはブレイブに、カイトは仮面ライダースナイプに変身する。
スナイプが銃を乱射した。弾丸は一発残らず、ブレイブに当たる。
彼女はガシャコンソードを召喚すると、Aボタンを押した。刀身が回転し、氷属性を得る。
弾丸が彼女の右手に当たった。ガシャコンソードは落ち、地面に突き刺さる。剣が地面を氷結させていった。
二人の間に、氷の道が作り出される。
「なに!?」
「しめた!」
スナイプが撃つ。
ブレイブは体を屈め、それを避けた。
そのまま氷の道へスライディングする。滑っている間、彼女はキメワザスロットホルダーに、タドルクエストガシャットを挿し入れた。
全身にエネルギーがみなぎる。
「くらえ!」

ブレイブが右足を高く上げる。変則的なライダーキックだ。
スナイプは咄嗟に、ジェットコンバットガシャットを左腰から取り出す。
起動させると、彼の前にコンバットゲーマが現れる。彼女のタドルクリティカルストライクは、それによって防がれた。
コンバットゲーマが、両腕の機関砲で撃つ。ブレイブは吹き飛ばされた。
彼はガシャットをドライバーに挿し、レバーアクションを行う。
ゲーマを見に纏い、スナイプはレベル3—コンバットシューティングゲーマー—へとレベルアップした。
スナイプは機関砲を撃ちながら、宙に舞う。
彼女がガシャコンソードを横に払った。幾重もの氷塊が射出される。
彼はそれを避けると、機関砲で反撃した。

「空中戦なら……」

ブレイブがギャレンジャックフォームになる。
彼女は強化型ギャレンラウザーを手に、羽を展開させ、空中に躍り出た。お互いの銃撃を、お互いがかわす。
ギャレンが近づいた。彼女はラウザーを振り回し、スナイプに斬撃を放つ。
彼は逃れるため上昇した。ギャレンが彼の足を掴む。
至近距離から、バーニングショットを繰り出した。スナイプは墜落する。後からギャレンも着地した。

「私を舐めない方がいいよ」
「この……!」

スナイプが新たなガシャットを取り出す。ギャレンが発砲した。

弾丸は彼の手に当たり、ガシャットが弾き飛ばされる。
彼女はそれをキャッチし、飛び去った。
彼は変身を解くと、体を引きずって道を引き返す。
行きは五分とかからなかったが、帰りは到着に二十分を費やした。

「大丈夫か？」

カツラギは、カイトの帰りを玄関で待っていた。一人戻ってきた彼に対して、カツラギはこう声をかける。それから肩を貸し、リビングまで運んだ。
その間カイトはずっと、自分の無力さを嘆き続ける。

「アカリちゃんのことは心配だけど、化け物を放っておくわけにもいかない。一刻も早く場所を突き止めて叩かないと」

二階からマナは、一部始終を聴いていた。彼女はとある決意を固める。

アカリはその翼で、とある場所に向かう。二年前激闘を繰り広げたアジト跡である。現在でも辺り一帯は、更地のままだ。

「自分のミスは自分で取り返さないとね」

取り出した戦極ドライバーの、フェイスプレートを外した。ギャレンはそこにゲネシスコアをはめ、腰につける。オレンジとピーチエナジーのロックシードを装填し、カッティングブレードを倒す。
彼女は仮面ライダー鎧武ジンバーピーチアームズに変身した。
彼女は耳に集中を集める。ジンバーピーチは聴力が大幅に上昇するため、かすかな気配も逃さない。

わずかな物音が、彼女の耳に届いた。彼女は発信源を特定するため、右往左往に動き回る。
すると音がさらに大きくなった。彼女が砂の傾斜を下る。そして左を向いた。
辺りは一面化け物だらけ。

「頭を冷やすにはちょうどいい」

メタファクターを腰につけ、エクシードギルスへ変身する。
彼女は渦中に入り込んだ。怪人が一斉に襲いかかる。ギルスは背中の触手を伸ばした。素早く連打し、突き殺していく。

「全員ぶち殺す！」

ところが数の差は、簡単には覆せない。
いつの間にか彼女は、敵に囲まれてしまう。ギルスは左足を軸に一回転し、蹴り殺した。手足のトゲで敵を切り刻む。
やがて敵は、ギルスに背を向けて逃げ出した。

「敵前逃亡とは情けない」

正面には坂がある。怪人たちはそれを滑った。彼女があとを追う。
彼らが一斉に左を向いた。地層の壁には、大きい穴が開いている。彼女は怪人たちとともに、その中へ飛び込んだ。
その場所は、元アジトの地下室である。爆薬が仕掛けられていなかったのか、そこだけは残っていた。
ただし手入れが行き届いていないため、経年劣化は激しい。今にも崩れ落ちそうだ。
おびただしいほどの化け物で埋め尽くされていた。奥には一つだけ、稼働中の機械が見える。
カツラギの言っていた装置とはあれに違いないと、彼女は考えた。

化け物を無視し、装置目掛けてジャンプする。必殺のかかと落とし—エクシードヒールクロウ—を放ち、それを破壊した。
ホッと息をつく間もなく、ギルスが苦しみ始めた。
彼女は変身が解除され、徐々に体が異形のものに変わっていく。
「な……何が起こった……？」
「我はゲムデウス。汝の体をいただこう」
「はっ!? どういうこと？ それにお前はどこだ？」
「汝の体内だ」
ゲムデウスとは、Mの中に潜でんいたバグスターウィルスである。
アカリはそれに、体を乗っ取られてしまったのだ。
まもなく容姿も、人間から化け物—ゲムデウス—に変わった。
「私の身体に勝手に……」
「うるさい。しばらく黙っていろ」
辛うじて保っていた意識も、今ここに途切れる。

翌日の早朝、マナもアジト跡に向かった。カツラギの反対を無視し、自分の体を押してだ。
しかし、そこは藻抜けの殻。続いて彼女は、地下室に繋がる穴を見つける。
中に入るとそこには、壊れた装置があるのみだった。
「恐らくあれが、なんちゃら装置に違いない。でもどういうこと？」
時を同じくして、カイトとカツラギには激震が走っていた。
研究所前に、怪人の大群が押し寄せていたのだ。それらは、アジト

跡地下室から侵攻してきたものだ。
中心にはゲムデウスが見える。右手には宝剣―デウスラッシャー―、左手には宝盾―デウスランパート―を装備していた。
不幸なことに、マナはすれ違ってしまったのである。

「アカリちゃんもマナも今はいない……こうなれば僕たちだけで行こう」
「「変身！」」

カツラギがWドライバーを腰につけた。するとカイトの腰にも、ドライバーが現れる。
カイトがドライバーにサイクロンメモリを挿した。そのメモリはカツラギの下に移動し、カイトは意識を失う。サイクロンを挿し直したカツラギがジョーカーメモリを入れ、ドライバーを横に展開した。
周りにオーラが現れ、彼は仮面ライダーWサイクロンジョーカーに変身する。
大群に向かって、Wが疾走した。素早い連続蹴りで、一体を吹き飛ばす。ジョーカーメモリをマキシマムドライバーに挿し込んだ。
Wは敵群にライダーキック―ジョーカーエクストリーム―を繰り出す。
次に彼らは、サイクロンメタルになった。必殺のメタルツイスターを喰らわす。
その後もWはヒートメタル、ヒートトリガー、ルナトリガー、ルナジョーカーと次々に姿を変えた。
その度に必殺技―メタルブランディング、トリガーエクスプロージョン、トリガーフルバースト、ジョーカーストレンジ―を放つ。
「強化されているとはいえ所詮は怪人。動きが単純すぎる」
ファングメモリを使い、Wはファングジョーカーにパワーアップした。

レバーを倒すと、肩にショルダーセイバーが現れる。彼らはそれを外し、敵目掛けて投擲した。怪人たちを傷つけたあと、刃はブーメランのように戻ってくる。
彼らはレバーを三回倒した。すると右足にマキシマムセイバーが出現する。
ジャンプしてからキックの体勢を取り、横に高速回転しながら、敵陣に突っ込んだ。

「ファングストライザー!」

その攻撃は軍団を全滅に追いやる。
予想外の事態に、ゲムデウスが驚いた。

「やるな、貴様……」
「貴様じゃなくて”貴様ら”な」
「いつまでも愛娘に戦わせたくはない。大人として責任を果たすだけさ」
「我が直々に相手をしてやろう」

エクストリームメモリが飛来する。彼らはドライバーにそれを挿し、展開させた。
Wがサイクロンジョーカーエクストリームに進化する。
左手のプリズムビッカーから、プリズムソードを引き抜いた。
両者の剣が打ち合わされる。Wはデウスラッシャーを押さえ込み、左手で殴り飛ばした。
ゲムデウスが後ずさる。ビッカーシールドにサイクロン、ジョーカー、ルナ、ヒートのメモリを挿し込んだ。
シールドにエネルギーが充填される。それを解放した光線が放たれた。
Wの技は、ゲムデウスに直撃する。爆発して、もくもくと煙が立ち込めた。

「なるほど。これが人間の実力か」

煙が晴れる。ゲムデウスは無傷だった。Wが構え直す。

ゲムデウスの姿が消える。キョロキョロと、辺りを見回すW。ゲムデウスは彼らの背後に、ワープしていた。

ゲムデウスが剣を振るう。気づくことなく、Wは斬り裂かれた。

彼らが振り向く。そこにはもう、ゲムデウスはいない。右から、彼らは蹴り飛ばされた。

滞空中に、ゲムデウスが現れた。恐るべきスピードで、ゲムデウスの連続斬りが放たれる。

ゲムデウスの踵落としが決まった。Wは叩き落とされ、地面に倒れる。

「なんなんだ……この力は！」

「もうおしまいか？　所詮、人間はその程度か」

「まだだ！　ダブルエクストリーム！」

ベルトを開閉させ、Wがマキシマムドライブを発動した。高くジャンプし、ドロップキックを繰り出す。

ゲムデウスは斬撃を放った。両者の一撃が、真っ向から衝突する。

ゲムデウスが勢いよく振り払った。Wは放物線を描いて吹き飛ばされ、地面に背中を強く打ち付ける。

ドライバーが弾け飛び、彼らの変身は解除された。

「それが切り札のつもりだったのか？」

「なに!?」

「次はこちらの番だ。死ね！」

横からライダーキックが放たれる。ゲムデウスが吹っ飛ばされた。キックしたライダーが着地する。

それは、仮面ライダービルドラビットタンクスパークリングフォームだった。

「お疲れさま。あとは私に任せて」
「なぜお前がここに？」
「アジトは藻抜けの殻だったの。嫌な予感がして戻ってみたらこの有り様だった……覚悟しなさい！」

ドリルクラッシャーを右手に、ビルドが走る。
両者は剣を、斜めに振り下ろした。互いの剣が、まじ合わされる。
ビルドは四コマ忍法刀を召喚した。左手で逆手に持ち、斜めに振り上げる。

「盾が厄介ね」

ところが、ゲムデウスの盾によって、攻撃は防がれた。
ビルドはジャンプし、膝蹴りを放つ。ゲムデウスの顔面に入った。
しかし、ゲムデウスはびくともしない。ゲムデウスの盾から、二本の赤い触手が解き放たれた。
ビルドがそれに突き飛ばされる。

「なんて強さなの……こうなったらあれを使うしかない。お父さん！この前開発したやつ！」
「あれはまだ調整が済んでいない。試験すら行っていないんだぞ!?」
「だけど……このままじゃ！」
「……父の無能を許せ……」

彼は彼女に、新兵器を投げ渡す。ハザードトリガーと、フルフルラビットタンクボトルだ。
トリガーの蓋を開け、中のスイッチを二回押した。そしてドライバー上部に取り付ける。次にボトルを振り、半分に割った。

それをドライバーに装填し、ハンドルを回す。
彼女は、仮面ライダービルドラビットラビットフォームにパワーアップした。

「実験成功！」

ゲムデウスがキックを繰り出す。ビルドは飛び越えて避けると、足を後ろに伸ばした。
ゲムデウスの背中を、キックが迫る。しかし、振り返ったゲムデウスの盾によって、攻撃は防がれた。
目にも止まらぬ速さで、ビルドが連続パンチを放つ。
だが、盾はびくともしない。ゲムデウスが剣で突く。召喚したフルボトルバスターで、ビルドは受け止めた。
しかし衝撃までは殺しようがない。ビルドは吹っ飛ばされる。

「さっきの奴等よりはまだ楽しめるか」

デウスラッシャーが赤く輝いた。ゲムデウスが剣を横に振る。ビルドに向かって、深紅の衝撃波が飛ばされた。
ビルドは武器のグリップを曲げる。中にクジラとジェットのフルボトルを入れたあと、トリガーを引いた。
銃口から、巨大な光弾が発射される。それは衝撃波を押し返し、ゲムデウスに命中した。

「性能は期待値を驚愕してるね」

爆発が起こる。煙に身を隠しつつ、ビルドはゲムデウスに接近した。そして銃口を突きつけ、射撃を与える。
ゲムデウスは倒れ、地面を転がった。

「やられっぱなしは気にくわない」

ビルドはハンドルを回し、必殺技を発動させる。飛び上がり、ライダーキックの体勢を作った。
ゲムデウスに触れるか触れないかの位置まで足を伸ばす。
一瞬間が空いたあと、足を縮める反動でビルドが突っ込んだ。ゲムデウスは投げ飛ばされる。

「これほどの強さとは……」
「これで終わりだ!!」

ビルドはドライバーを操作し、仮面ライダービルドタンクタンクフォームに変化した。
ドライバーからフルフルラビットタンクボトルを取り出し、フルボトルバスターに挿入する。するとビルドの足が、キャタピラと化した。
その姿はまるで、一つの戦車のようだ。
ビルドが引き金を引く。光弾が連続でゲムデウスに襲いかかる。
敵の周りを走りながら、彼女は砲撃を続けた。爆煙がゲムデウスを包もうと、彼女は攻撃の手を緩めない。

「ムテキの力に敵うものか」
「えっ?」

煙が晴れる。人影が立っていた。
その正体は、さらに禍々しい見た目になったゲムデウスだ。腰には、ゲーマドライバーが巻かれている。

「無傷!?」
「我が名はゲムデウスムテキ。その名の通り、どんな攻撃も通じない」

ビルドは足を元に戻すと、再び砲撃を始めた。ムテキは平然と、歩

みを進める。
武器を投げ捨てると、ビルドが走った。そしてその勢いで、ストレートパンチを放つ。彼女の拳が、ムテキの胸部に当たった。
「ものわかりが悪いな。あらゆる攻撃も効かん」
目にも止まらぬ早さで、ムテキの乱打が繰り出される。彼女になす術はなく、攻撃を浴び続けた。
攻撃が止む。効かないとわかりつつも、彼女はパンチした。
「ゲーマドライバーは人間にしか使えないはずなのにどうしてお前が使える？　それにこのガシャットはどこで!?」
ムテキがビルドの右拳を握る。彼女の左拳が、ムテキの顔面に当たった。
しかし動じない。
「ガシャットは元々、バグスターウイルスの成分が詰まっている。だからバグスターがガシャットを作れても不思議ではないだろ」
ムテキの膝蹴りが、彼女の腹部に入る。体から力が抜けるビルド。
ムテキは彼女を、真上に投げ飛ばした。
「その理屈はおかしいでしょ……」
ビルドはボトルを入れ換え、ローズコプターハザードフォームになる。腕のプロペラを回し、姿勢を安定させた。
「次にゲーマドライバーをなぜ使えるかだ。我は人間の細胞も持っているからだ。具体的にはお前の仲間のな」

ムテキが掌から、紫色のエネルギー波を発射する。ビルドはプロペラを、体の正面に配置した。回転数を上げ、光線を防ぐ。
ムテキの攻撃が止んだ。ビルドが着地する。
「仲間!? アカリのこと?」
「その通りだ」
「なるほどね……アカリは私が救い出す」
ビルドがトランスチームガンに、コブラフルボトルを挿し込む。
蒸血の掛け声と共に、その姿がブラッドスタークのものに変わった。
「お父さん! カイトさん! 手伝って!」
スタークの叫びに応じて、カツラギは仮面ライダージョーカー、カイトは仮面ライダーバロンレモンエナジーアームズに変身した。
「人数が増えようとなんの意味もない」
ジョーカーは接近戦を行い、バロンはソニックアローで遠距離から射る。
「見極めるんだ……チャンスを!」
バロンとジョーカーが、ライダーキックを放つ。爆風が吹き荒れた。
ところが、二人の攻撃はムテキの両手で、難なく受け止められる。
ムテキが慢心した一瞬の隙をつき、ブラッドスタークが液状化した。そして接近し、ムテキの体内に侵入する。
「アカリの中に異物が二人……選ばれるのはお前? それとも……」

ムテキが苦しみ、その場でじたばたする。そして段々、アカリの姿に戻っていった。
ゲムデウスは弾き飛ばされ、アカリの体から離れる。
直後に、スタークも分離した。ひどく疲労している様子だ。カツラギが彼女に駆け寄る。
アカリはそれを確認すると、ゲムデウスに対峙した。

「まさかそんな！」
「私の体で随分と勝手なことをしてくれたね。その代償は重いよ」

アカリはガシャットを取り出し、ダイヤルを回した。
以前、カイトから奪ったガシャットギアデュアルβである。

「変身！」

アカリはそれをドライバーに挿し込むと、レバーを開いた。
板が通過され、アカリは仮面ライダースナイプに変身する。さらに、出現したシミュレーションゲーマを身に纏い、シミュレーションゲーマーレベル５０になった。
スナイプが全身の砲台を、ゲムデウスに向ける。そして砲撃を始めた。数多のエネルギー弾が、ゲムデウスに放たれる。
ゲムデウスは盾を前に突きだし、弾を防いだ。そのあと剣を高く掲げる。
スナイプの足下に魔方陣が現れた。直後、彼女を落雷が襲った。

「紅蓮爆竜剣」

ゲムデウスが呟くと、デウスラッシャーが燃え上がった。ゲムデウスが走る。それから剣を横に払い、スナイプを吹っ飛ばした。

「逃がさん」

ゲムデウスは助走をつけて、高く跳び上がる。
滞空するスナイプに近づこうとした。
彼女の上を取ると、ゲムデウスは剣を縦に振る。斬撃を受け、彼女は地面に激突した。
ゲムデウスが剣先を下に向ける。そして勢いよく降下した。スナイプを串刺しにするつもりだ。
刃が迫る。彼女は左に転がり、ギリギリでかわした。ベルトのレバーを素早く開け閉めし、立ち上がる。
ゲムデウスの真後ろに移動し、両手の砲口を突きつけた。

「くたばりな！」

放たれるビーム。ゲムデウスは大ダメージを受け、前に突き出される。

「最初から特大の一撃狙いだったのか……」
「単純な火力はトップだからね」

スナイプがドライバーを、鎧武のものに換えた。
カチドキロックシード、極ロックシードを使い、鎧武極アームズに変身する。
鎧武は影松・真を召喚した。それを両手で持ち、駆けて行く。彼女が突いた。ゲムデウスは盾で、それを防ごうとする。ところが、盾は音をたてて崩れ落ちた。
ビルドの数々の攻撃が、盾を少しずつ消耗させていたのだ。

「逆転の狼煙が上がった」

ゲムデウスは上げた剣を、勢いよく振り下ろした。

彼女は頭上に、メロンディフェンダーを呼び出す。斬撃を弾かれ、ゲムデウスの体がよろけた。
その際僅かに、ゲムデウスは全身の力が抜ける。鎧武が回し蹴りを放つと、デウスラッシャーが吹っ飛ばされた。

「貴様……！　断じて許さん！」
「自分の立場わかってるの？　許さないのは私だよ！」

彼女は得物を大橙丸に変えた。ゲムデウスに何度も、斬撃を浴びせる。そしてがら空きの胴へ、剣を横にして斬り抜けた。
鎧武とゲムデウスは少し間を離れ、背と背を向かって立っている。すぐに、ゲムデウスが膝をついた。

「お前の野望もここまでだ！」

鎧武がドライバーを操作した。すると全身に、力がみなぎる。
溢れ出すエネルギーが、オーラとして外に漏れた。
彼女はジャンプし、ライダーキックを繰り出す。足先には、果実のエフェクトが現れた。ゲムデウスを、必殺キックが貫く。
鎧武が着地した。
人間への恨みを抱きながら、ゲムデウスが爆発する。
鎧武は立ち上がると、変身を解除した。

「ふー……」

空は紫色に染まっている。時刻は四時を過ぎたところだ。
アカリは崩れ落ちた。心配して駆け寄るカイトだが、なんてことはない。彼女はすやすやと、寝息をたてていた。
アカリとマナはその日、学校を欠席する。
翌日、マナは傷のために欠席した。一方でアカリは、いつもの時間に家を出る。

荷物はすべて部室に置きっぱなしだ。それだけならともかく、制服まで忘れてしまっていた。
そこで彼女は、マナの制服を借りることにする。テニスウェアでの登校は、羞恥心が妨げたのだろう。
学校に着くと、彼女は顧問の元に向かった。

「おはようございます！」
「おはよう、昨日は体調を崩したのか？」
「ええ、まあ、はい」
「お前、仮面ライダーだったんだな」
「どうしてそれを!?」
「校内その話で持ちきりだぞ」
「そうですか……」
「秘密にしていたかったんだな。どうしてだ？」
「だって秘密の方が格好よくないですか？」
「ふふっ……」
「ちょっと！　笑わないでくださいよ！」
「それより昨日な、サクラコがここに来たぞ。アカリに謝りたいって。何があったんだ？」
「はははっ……いや、大したことじゃないです。では」
「今日も頑張れよ！」

アカリが部室に戻ると、サクラコの姿があった。その表情は、ひどく塞がれている。
アカリは一瞬戸惑ったが、すぐに声をかけた。

「ごめんごめん！　すぐに鍵を開けるから！」
「あの……その……一昨日はごめん……実は私、アカリの才能に嫉妬してたんだ。でも違った。仮面ライダーとしてずっと努力してたんだよね……本当にごめんなさい」
「もういいから、時には感情が先行して思わぬ言葉を吐いてしまうこ

ともあるって。さ、仲直りしよっ？」
「うん！」

鍵が開かれた。これまでのしがらみも消え、部員たちはいっそう練習に励んだ。
その結果アカリは地域大会に優勝し、県大会への切符を掴む。
しかし結果はベスト8。彼女は準々決勝で破れてしまった。
アカリに勝利した少女はそのまま優勝し、全国大会でも三位の成績を残した。
部員たちは総出で、アカリの試合を見守っていた。悔しくて泣きじゃくるアカリを皆で励まし、焼肉屋に連れていく。
食べ終わる頃には、すっかり調子を取り戻した。
大会が終わるとすぐ、部活は引退となる。アカリたちは祝福を受けた。
そのあと彼女らは、大学受験に頭を悩ませることになる。受験勉強に四苦八苦し、時が流れていった。
模試の偏差値も徐々に上がっていく。アカリはその度に油断し、マナは励みとした。
マナは年明け前、推薦で受験を終わらせた。元々成績を取っていたためだ。
しかし彼女は、アカリの勉強に最後まで付き合う。その甲斐もあってか、アカリはセンター利用入試で、同じ大学に合格した。

事件収束からまもなく、カイトはカツラギの手も借りつつ、Mを作っていた。過去に一度作った経験があるため、作業は順調に進んでいった。
これを利用すればシオリの復活が可能ではないかと、カイトは睨んでいる。
初めて説明されたときアカリは、シオリが自我を取り戻せるのか疑

問に思っていた。ゲムデウスを除いて、自我を持つ怪人はこれまでいなかったからだ。
そこでカイトは、手動で一からプログラミングすることを決意する。
これがなかなか大変であり、時間を多く費やす結果となった。
そして半年後、具体的には翌年の二月、カイトは遂に完成させる。
赤い土管のような機械に、コードが何本も繋がれていた。
コードはさらに、カイトのパソコンに伸びる。彼は今まさに、最終調整の真っ最中だ。
シオリの死体は現在、冷凍保存されている。
カイトの見直しが終わった。すると彼は、地下室の入り口にやって来る。
そこでは、アカリとマナが待機していた。カイトが地下室を開ける。巨大な冷凍庫があった。
冷気が漏れ出しているのか、全体的に寒い。
カイトが冷凍庫のロックを外した。するとすぐに、二人はその中に入る。
いつでも運べるよう、シオリはリアカーの上に乗せられていた。彼女らがそれを押す。二人は防寒手袋を着用しているが、凍えるような寒さを感じた。
それが冷凍庫のせいなのか、それとも目の前に死体があるせいなのかはわからない。
大急ぎで坂を上って一回に上がり、玄関を出る。装置の横には、カツラギが控えていた。
彼らは三人がかりで、シオリをその中に詰める。
遅れてきたカイトが、パソコンのエンターキーを押した。装置はガガガガと、けたましく鳴り響く。
一瞬動きが止まったあと、筒からシオリが吹き飛ばされた。
「ママァァ!!」

アカリはシオリに駆け寄った。抱きつくと涙が溢れる。感触や匂いがどれも、アカリの記憶と変わっていなかったからだ。

「ア……カ……リ……？」

シオリは始め、目の前にいるのが娘と認識できなかった。ところが、面影は似ている。

「シオリ、君は病気で昏睡状態に陥っていたんだ。だけどもう大丈夫だ」

一度死んで甦ったことを告げれば、彼女はパニックになるに違いない。カイトはそう考えたため、あえてぼかして説明した。

「あなたが治してくれたの？　ありがとう。それにアカリも、大きくなったね」

カイトのこれまでの努力が、実を結んだ瞬間である。欠けていたピースが揃い、彼らは次の未来に歩き出す。